

能楽を愛好した人々の思い出集

—「近代名古屋の能楽を支えた人々」に向けられた手紙より—

東海能楽研究会 発行

目次

発行にあたって	東海能楽研究会	笥 鉦一	1
石井 鐘子			3
内田フミ子			16
手嶋なみ江			17
吉田 和子			18
蔭山 朝子			25
武藤 豊子			27
垣村 重一			28
富士道周明			31
佐藤 英雄			34
大森英三郎			37
水谷 治郎			38
片山九郎右衛門家より			39
小島 英幸			39
平子 稻美			41
近藤 宗光			42
高橋 秋子			44
松田よし子			46
大川嘉奈子			47
伏原 靖二			47
大原紋三郎			50
齋藤 長男			52
藤井千鶴子			54
鬼頭晴義			59
中尾 和子			64
東海 忠生			99
清水美穂			103
渡辺 義雄			107

『私の音楽生活』
(昭和四十六年発行) より転載

発行にあたって

東海能楽研究会 笥 鉦一

平成六年三月、当時、能楽協会名古屋支部副支部長を務めておりました私は、名古屋能楽界を支え育ててきた先人たちの功績を明らかにするとともに、能楽師、愛好者の皆様の記録をも留め長く後世に伝えるべく、「近代名古屋の能楽を支えた人々」の編纂作業に着手しました。

明治維新以降の名古屋能楽界は、旧藩以来の名家の消長甚だしい中であって、愛好者を中心とした幅広い層によって支えられ、新しい担い手が次々と育ちつつ今日の隆盛に至っておりますが、古の実態を総合的に記録した資料類は少なく、とりわけ地域において堅実に能楽を支えていた市井の人々の事績は歴史の陰に埋もれがちです。

関係各位から数多くの情報と資料をいただき、また椋山女学園大学の三木邦弘先生には格別のお力添えをいただいて、当地域の演能番組を網羅する総合記録集としてのデータベース化を実現しました。「近代名古屋の能楽を支えた人々」は、平成十三年七月に東海能楽研究会から刊行され、専門の研究者の方々からも身に余る評価をいただきました。

しかしながら私の力不足もありまして、資料収集の過程で当地域の歴史の生き証人ともいえる方々から大変貴重な御手紙を提供していただいたにも関わらず、これらをとりとめ公の場に御披露する機会を長く逸してきました。

このたび、東海能楽研究会会員の助力を得て、『能楽を愛好した人々の思い出集——近代名古屋の能楽を支えた人々』に向けられた手紙より』という形で、ようやく皆様方にお知らせできる運びとなりました。およそ十五年もの月日を要してしまったことにつきまして

は、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

この『能楽を愛好した人々の思い出集』は、大正・昭和のそれぞれの時代で当地域の能楽を支えていた方々の、まさしく生の姿が描き出されているものと自負しております。書簡ですので、研究論文のようには的確ではありませんが、だからこそ個人の思いがまさしく純粹に伝わってくるものと思います。

先行きの見えがたい平成の世で御活躍される方々が、当時の先人たちの奮闘努力、切磋琢磨、侃々諤々の生き様を知る手がかりになれば幸いに存じます。

石井鐘子

平成六年

呉服町舞台

呉服町の能楽堂時代 小学校三、四年の頃だから能をみるより狂言が面白かった。末広狩り、三人片輪、棒しぼり、二人袴、舟弁慶の義経を梅ちゃんがしたのを覚えていいる。(梅ちゃんの父は)金剛流・白木周次郎。その当時、名古屋一の旅館志那忠の主人。乃木大将がお泊りの所へ木綿の着物のソマツなりの奥方が尋ねてこられたが、布団部屋へ入れたと云う有名な宿。

呉服町舞台は日本式四人づつ座る柗席であったが、私は二階からみていたのを覚えていいる。

(昭和八、九年頃、東京九段下の観世能楽堂で能をみたが、みな柗席だった。)

女学校入学等で御無沙汰する中、父が亡くなり暫く遠ざかる中に布池町能楽堂となった。

庭に花がきれいに咲いていた。四月始だったのだろう。ブランコがあり、狂言の子のつた覚え、井上もそこ、井上乙女さんの弟だった。

観世宝生金剛たまに喜多流。若宮様へお参りしてそのついで(?)なのか呉服町の能をみた。琴の講習所が出る時は人力車に姉と二人でのって行った時代だが、見に行くだけだからデン車で行った。

布池町舞台

能楽堂が新しく建った。合掌作りの屋根があつていかにも能楽堂。布池が建った時にキフをしたためであろう、はじめて見た時記念扇女物影向の松のを頂いた。母、祖母、姉、私が二枚の札を交たいでみに行っていた。

この舞台の屋根が全部ついていて、神宮のは屋根の途中までしかなく、全体の見なれた者には物凄く残念に思ひましたが、平成四年でしたか、鳳鳴会で観光ホテルで西村欽也師と親しくなり昔話の中、布池に小学校へ入る前に父の弘敬さんが、舞台が建ったからと（欽也さんと兄の滋郎さんを）見せにつれて行かれ、合掌造の屋根から全部、呉服町から移転完成し、これから見所とか玄関等をかぶせる様に作るんだと言う事を（弘敬さんから聞いたと）話して頂きました。呉服町の舞台を移転させたものだと言う事、欽也師の亡くなる前にきいたのです。

手紙を頂いていたのに住所不明となり高安様の家に送ったのですが西村様と書いて不明等と言つて返つたりしている中に亡くなりましたが…。

呉服町の舞台を布池に移して見所や楽屋、宴会場にもなる大ざしき、宝生の「内藤鎧造

先生の」家か住んでみえた所等を作り棧敷は後方二枡グルッとサジキであとは椅子の布池町の舞台となりました。

テリクモリがよかつた。

面の変化が嬉しそうや輝き又泣きそうにみえ、熊野の花びらが舞台に舞にうけとめる扇にもあふれホロリと舞台に流される喜之先生代り「俊寛」の落つる木之葉がぶたいでカサツと舞つた。神宮になつて木の葉の伝をみたけれど木の葉の位はナニもなかつた。蛍光灯のない布池は勝手に空想がふくらんだらしい。九段でも先々代左近安宅で、鳴るは滝の水で滝が半分迄ドドツと見えた。今の松涛町でワキ正一番前に席指定だったが二階のライトがまぶしくて舞台がみにくい。一般席を明るくのつもりでそこら五六席がみにくい。あれは蛍光灯の光で表情が前より出ぬのではないかと思ひましたが、まだ名古屋の舞台は蛍光灯の配置がよいが、松涛のカンゼ舞台のワキ

正前列の指定席に二階からの大きな光が見ている顔にあたつてまぶしく舞台がみにくいのに驚きました。

見付柱の方へ席を二席移りましたら柱に二階からの光がさえぎられて（デンキが見えないので）みよくなりました、そこらにゐる人にきいてみたら「みにくい」と言つてみえました。今度の舞台（名古屋能楽堂）も松涛の様にならないよう氣をつけて下さいませ。

布池の見所は一般的には椅子席で、後方二枡並か正面ワキ正みな四人詰枡席で、正面真中の殿様の見られる席が伊藤次郎左エ門家、岡谷惣助、関戸、そのそばに豊田ナントカ様の女の方の枡席あり。豊田さん達は見付柱の奥前列にあつた。一般我々庶民も各指定席に決つた席でみていました。私の家は途中からワキ正二枚、福井五郎先生だったが正面からみたいと云うので林愿藏先生の持ち席に變つた。

熱田の見所は指定と言ってもグルグルの席が替るので目耳の劣えた私は困るので、朝早く指定席以外の席を指定しに行かねばなりません。中には目がうといからと言う人の為前方をとられる先生もあり、補助席に名の張つてある指定席もあり。

保能会計りでなく能維持会が布池町で出来た。能も金剛も宝生もカンゼも出る人の都合でカンゼが割に多かったか合併で行はれたかそのうちに観世会宝生と独立出来るようになってきた。

布池も戦時末期に赤銅の大きな樋等、寺の鐘供出等と同様笹島貨物駅まで持つて行かれる事になり、或る朝宝生の内藤鏗造師と手入の又さが門をたたかれた（ベルだったと思うが）。一月の朝六時頃だった。笹島貨物駅まで布池の赤銅の大きな樋等立派なのがあつたのを供出に來たが、十時からとの事であづかつ

てほしいとの事。

志那忠（白木周次郎）に頼んだが断られたので又さが家へつれてきたのだった。米倉が供出は岩塚でしてしまうのであいているのでそこへ置いて行かれた。

白木周次郎・忠夫・梅夫・信平さんが関係されたと共に、（白木周次郎の）五女利子さんもこの舞台で松竹梅を弾き中程のいい所で拍手が起きました。琴の講習所と違って舞台上の瓶等で音響がよいので琴もよく鳴り拍手が起きたのですが、ビックリしてバランスがくずれてまごつかれた位でした。

私もこの舞台で石橋を佐藤検校と尺八なしでと代稽古の方に注文つけられ「大丈夫カナ」検校に言はれましたが、よく鳴る舞台にはでやかな石橋、獅子虎でんの舞楽のみぎん、獅子の座にこそ直りけりと弾き終えました。「尺八なしでよかった」と検校に言はれました。

能に傾く私に沼波司業（女の最高位）は藤戸、屋島等教えて頂き翌年屋島を講習所で弾きました。弾き出してアツと驚きましたが楽屋がシーンとしてしまいました。釣りのいとまも波の上から高松の朝嵐とこそなりにけり、びつくりして代稽古のお師匠様にきくと、こんな珍しい古曲はお師匠様達が始めてだから耳をすまされたのでした。石橋程むつかしくない軽い曲でしたが謡の気持ちも解るので：脱線脱線。私が能楽に傾いていたので沼波さんが次回山台の講習所で屋島か藤戸を弾けと言はれました。

熊坂を見て不思議な帽子、どうみても唐草の風呂敷みたいな装束と冠り物がアンバランスで非常に印象が強かった。布池時代までは関戸様の能装束拝借していたのだった。熊坂のかぶり物を忘れてきた為山本博之（京都か）着付の時風呂敷を総動員して熊坂の頭にかぶせた、と神宮になってから話されていたのを

能雑誌で読んだ。アアあれは矢張りホンモノでなく風呂敷の何枚かでまに合せた頭巾だったのかとハッキリ思ひ出した。

石田元季

昭和七、八年頃櫻菊女子学園で源氏物語の講義をきいています。姉が金城女子学校国文科で三年間源氏、母が市一で卒業会で源氏をきいています。国文学の事、狂言であろうがみんなみんなよく御存知でホントに国文学者の能の話もきくので思ひ切つて頼み、林愿藏先生に紹介され入門した。私は石田元季先生のおひき合せて林愿藏先生につきました。

石田元季 一中よりはじまり国文学者金城国文科櫻菊女子学園講師

源氏物語の名講義 俳諧と横井也有で学士院賞（大変立派な賞なので）

帝国学士院賞「俳文学考説」昭和十五年

森村宜稻

森村宜稻の翁の掛物から。市一の四年生の時、ヒョーナ事から宜稻先生につく事になり、還暦祝の展覧会に、母はお雛様を（嫁入道具の為か）私は翁の絵をと紫峰先生（奥様）に話すと「そうしておきなさい」と決定、徳川美術館各部屋にズラリと並ぶ中に翁の絵は他を押し立派でした。

実は美術館が普通の家より建ちが高く、沢山並べてある時は解らなかったが、家の床の間にかけたら長すぎて下の方まで、私の家は天井が高く琴の響もよい高さでしたが掛物が長すぎると思ひました。一般平均の家では困られた？と思う。

ホントに立派な絵でしたが焼夷弾火災で失いました。岐阜宜稻遺作品に卒塔婆の大屏風と翁。私の絵の下書のようなまものの翁が残

つていますが翁らしいすぐれた翁でした。焼
失残念です。

森村宜稲 日本画家 卒塔婆小町の屏風
岐阜岩村の養子又養子。

日本画家久邇宮家が師事された。

宜稲会館（現在は東区東桜、森村記念館）

先生の家でみた門水の狂言絵と熊野の絵を
見た事を短歌に出したら、門水ってナニです
かと先生が言はれ、市一卒の短歌会員全員ド
ツと笑ってしまった（九州の方出の先生）。

西村弘敬 高安滋男 西村欽也

高安流から西村弘敬さん。シテ方をおかさ
ぬ舞台に余りはじめは気づかなかったが大変
な事と思う。

笹島駅から新駅になった頃八高の石井直三

郎先生によく似た人が駅の広場にブラリブラ
リ？アッ西村弘敬さんが洋服をきてゝ笹島の
頃は鉄道局の人は別に建物があった。新駅の
二階以上に勤務となり昼の散歩だったと知っ
たが。

私が幸友会で景清だったかを打った時樂屋
で待っていて、「全く御立派クロトでもそれだ
けうてない人もある」とおせじを言って下さ
った。随分長くしてみえると思うが旧姓は？
堀内、じゃアもしかして茂右衛門さんの？ハ
イソウですか、私は小僧っこの時茂右エ門さ
んの家に入りビタリ。関西線が出来る時、町
内全部、立のきの事で町内会長でもあり、町
の地主でもあるので鉄道のエライ様と若造の
私がお供で行ったのですが、毎日入りびたり
は私にまかせられてゝいたんですヨ、ア、明
治の頃、新会館から禰宜町へこした時の事で
すか、その明治時代から関係があったわけで。

高安滋朗（名簿には滋男なれど家元としてズーッと滋朗でした）、西村欽也の兄弟は少年ワキ師だった。市一だった私がこの少年が市電に新栄辺りで乗ってきて東邦へ通うのによく会った。

兄さんは高安滋朗として出演の中、割に早死され、欽也さんは亡くなる二三ヶ月前に「私がこんな大事な役目をするとは思ひもかけなかった、終りまで端役としてつとめる事で終ると思つていた」と。お父様から賀状を頂くようになった話やら「長い事鼓をおやりだと思ひますがいつから？前名は十二堀内さん！もしか茂右エ門さんの家？」と景清を打った時ほめて頂き、祖父とのつき合を話され、明治終り頃からの話をきき、知った事をきいた事がらを欽也さんに話した。

高安先生にこの間のしきし絵を分けて頂き高安との関係がつづくワキの旅僧を見てア、これは高安流と解るのは、（角）寸帽子のかむり方、耳の当りで少しひだがあり耳をかくし

たこの型は好きです。他流は耳の後に流してしまう。私は高安流のこの型の方が好きです。

林愿藏

布池の頃は観世も宝生も金剛も一緒にみましたが観世の玄人の方々の時の地頭は武田宗次郎先生、副が林愿藏先生、そして河村鉦二、横井鱗屋、吉田寸作、安田九蔵さん等、林社中澗水会下つて吉川翠溪、岩田由之助。

保能会が維持会となり会員も大きくふくらみ、だが、保能会等計りでなく玄人の、主に宗家関係の地につかれていたので林先生の弟子としてでなく武田宗治郎先生門下。地頭が宗治郎先生副が林先生であつたから…。

地頭の武田先生は大正二年から家元（観世左近）の命で名古屋に観世流を広めるようにと命ぜられて教えに来てみえた。

保能会ばかりでなく家元左近の地にもつか

れていた。林先生の弟子だったが、大正二年から家元の命で名古屋にカンゼを広めるよう派遣された武田宗次郎、先ず鳳鳴会員だったからでしょう。

林愿藏先生は水野家の長男。徳川家に仕える士族。林の家は旅館をしていて大きく、養子とされた。士族で謠が出来るので八百屋町で教えられた。東邦電力(現中部電力)に勤め、夜のお稽古。準職分名古屋で柴田初太郎と二人。弟に水野申三・香椎袁二。(香椎袁二は水野申三の大鼓の号 申三は新聞で能批評もしていた)

林社中澗水会

河村鉦二

勿論河村大鼓のお父さん。

一番の弟子。

横井鱗子

ウロコヤ将棋基盤店。

吉田寸作

漆器塗名人。漆器にみごとな

蒔絵も。

安田九蔵

横井さん、安田さん等私が謠を習ってゐて女でも謠出来るナとヨコイ三人姉妹、安田さんも入門された。

吉川翠溪

日本画家。

岩田由之助

この方師範となられた。

後藤契雪

勝鬘寺住職。国鉄勤務だった。師範となられた。今の能楽堂

でおめにかかった。夜のケイコで女中に迎にきて貰っていた私。明治橋をこした牧野国鉄官舎の二人の方に帰宅を送って貰うようになったその一人。

長男に謠関係の事をミツチリ教えられたのに戦死された。二男は養子に出されてゐたので三男が継がれたのできびしく教えられた。長男のようにはいなかったとお話でした。その方も早死。

觀世会を見るようになる。

地頭は武田宗二郎先生、そこに並ぶ人は林先生、横井（うろこや）、吉田寸作、岩田由之助、安田九藏、河村鉦二（地頭）等澗水会が牛耳っていた（吉川翠溪 角田半兵衛、祖父江繁重）。もう一方は平野天杭が橋岡先生の方の地に名高商の先生達のグループ。

林先生に聞いた話。舞台に女がのつたと言うので舞台を削って潔めた（狂言方からの申出）。

能を保つ為に行う保能会がやつと名古屋の能を保つてゐた。はじめ頃、明治か。戦争からかえつて軍服姿で出た人もあると云う話も林先生からききました。

柴田初太郎

安達原を出された時（保能会）、能がすみました暫くして見所の私の所へ柴田先生が御礼にみえました。コンナに熱心にみて頂いて有難うございました、と言はれるのです。実は前シテ着流のきものがどう言う風に仕立られているのかと目を皿の如くシテを追つたのです。そして自分のキモノを装束の様に作り更えたのです。裾を…、前身を…切上げ、切下げると…上リツパナシではく略 こうして能のキ方の如くにしてキモノを着て、八〇キロの私が肥えていても上手にキコナしてみえるとはめられた。この秘伝（！）でした。その着物を洗い張りに出したら斜の所を切られて寸法がくるつた。

柴田先生も伊藤慰子さんの松風ツレ謠や地についたりして先生とも話すようになる。

柴田初太郎先生は七間町で、職忘れしました。（鳥籠販売業だった）

福井初太郎 福井五郎

初太郎先生は御養子で好生館病院の医師として生活を過され、小鼓の家をまもられた。五郎先生も医師として名古屋榮にサナトリウムのある病院として有名な森田病院に山田師と副院長山田医は家をつぐ為福井富男先生院長として活躍された（福井五郎の本名は富雄である）。各大病院が林立の戦後良久先生がアトをつがれたが病院はこわされ個人医。

名古屋には保能会と言って能が今にも絶えそうなのをカツカツ保って行こうと努力する人々によって保能、徳川家に傳るシテ役はチリチリとなり、囃子方の方々がガツチリと例え外の職につかうとも囃子方として盡して行こうとされ医者となり、県庁につとめ等して能を守って行く事にした、と福井五郎先生であり主治医の富雄先生でもあった幸清流の五郎先生にききました。

本重町の伊藤萬常さんの家にお遊びにとお詞を頂き小鼓をはじめた。仕舞い習いたかったが姿がダメと五郎先生が伊藤さん元重町の五郎先生の家にお遊びにと誘って頂いたので押かけてゆく。

桜菊同級の加藤光子さん（東邦電力の加藤さんの妹）が多治見から通学なので祖父江繁重さんから林愿藏先生に入門、繁重さんから福井初太郎先生にもつがれた。（二年位アト）

良久先生のお兄さんに小鼓ミツチリ教えてあったが、現役二ヶ年海軍軍医としてバタバヤ沖戦争叢雲に乗っていて（このムラクモに私の弟が主計長としてのり軍医として福井先生の御長男が（両方とも知らず）主計の係りの金庫が倒れ使へなく他の艦に移った弟は無事。ムラクモにのつていると思っていた私に会の水兵が堀内さんが死んだかと合掌してくれた話もあり。）激戦沈没戦死されたので良久先生：となるが未完の為林啓次郎先生に托さ

る。

林愿藏先生も長男戦死され二男は他家へ養子になってをられたので三男が受けつがれたが割に早死された。

好生病院に柴田初太郎先生の父が事務員としておつとめであったとも調べて分りました。折角の準職分になられた林家、柴田家も継承者死亡と柴田家は素人に還られた。

名大学生が鼓のケイコに来ていた。打っている二人の人が物になりそう。バンシキの樂をしていた時は一オクターブ上のカケ声ですよ、声がつらくなるけどネ等と話してやった事がある。先生に、先生お弟子をとりなさつては？と言うと、先生エ？エ？と不審顔。郡さんが私達弟子でしょ？と言はれたので、先生が気がついた様子。

そして柳原さんとなって御披露の時、福井先生のお母さんもだったか私が黒紋付の羽織きて行った。

謳調会 加藤良久

加藤良久、女師範達を集め謳調会。地拍子舞の研究会。

有賀師、服部師、飯田しん子（頼惠氏夫人）が謠、舞、舞囃子を出して名誉師範中村つゆさんも師範と同じ位で行い生駒美代子さん高木さん等若手も加わり私達素人も役をさせて貰ったり舞ったり。福井先生、河村先生、笛の豊二郎先生、藤田先生で今の家元も共に五、六才から参加して頂き、太鼓野崎先生、鬼頭先生。

舞につけても謠うのも地拍子が必要。囃子方の先生の御援助で礼金も少して毎月加藤先生の家で謠、舞をケイコ。素人の人もまじって行はれました。私も鼓をうたせて貰いましたが、中之舞を舞う人が一段らく卒業して（？）序之舞となり何度も何度も序之舞をうたせて貰いました。謠一番シテワキ地等もさ

せて頂いた。素人荒井静江様、渡部様、大野様、植村様。

私が謠をはじめた頃、会を開くのは八重垣クラブとか料亭などでした。女が大分ふえたとは言え僅かでしたが女が舞台にのる事がよくないと言う考へが大きかったようです。舞台に女がのったと言うので狂言方から抗議がでて舞台を削ったと言う事もあったのでした。

女は今も上れないのは相撲の土俵だけとなつて文部大臣の女性が大憤慨、能舞台もそうだったんだけど…女学校三年の時一日学校を休んで本場所へ言ったら「南瓜のすもみと女のスモミはない」と友人の母さんが言っていたと言はれた。海難救済会等船舶援助の会に寄附をしてあったので東京での集会に国技相撲場等が会場となりスモウも母がみに行き名古屋場所も平気だった。

女の人もふえた（勢以様と金子さんそして

伊藤慰子、私、金森夫人、丸髻の高木さんの四人が澗水会メンバーだったが丸髻の榎本夫人もふえ、横井三姉妹安田さん市杵）とふえてきた。殆ど料亭であつたが、舞台が女も許されるようになって、舞台で澗水会が行われるようになった。三十五周年？の時布池の舞台で林立しての写真をつしている。女が舞台で発表会に堂々と出演出来たのである。

アノ頃はテープがないので本番をきき自分も本番として行つた。通小町を舞つて武田先生の地頭で舞つた。どなたについてみえるかときかれ武田先生ならそのように立派にまえますかとほめて頂く。

テープ、ビデオとなつて謳調会の役はすんだ。

女師範の有賀さんが石井会入って砵を舞いたいと急にその場で決つた時言はれた。

また研究会の、砵の地謠が余り出なかつたの

で私に「入つて。」と言はれた。鼓でアツチコツチで打っていたので覚えていたので絶句される所が二三ヶ所あつたが謡ってゆけた。有賀先生が亡なつた時香典を送つた。「入つて。」の詞を頂いたので：有賀先生が亡つた時知らずアトで香典を送つた砵のお礼です。長谷権宮司と姉弟（兄姉か）なので玉串とすべきだつた。

八重垣町は小田原町では宴会に藝者衆がとりもちニツ奴か舞台のあごかけで女の私達のそばで話合つた（上の芸者長者町に琴の稽古に毎日通つていたので若い奴 ニツイチ等顔見知りもゐた）オ・ここで三人コヨシさんとフジイさんとジャアの三人は能楽芸者で物凄く楽屋に通じ宴会もこの三人がとりもつた。

主人の還暦祝にこの一番フジイを気がきくからと私の指名で家での取りもちを頼みました。所がノーベル賞を頂いたりした時で大学の数学の若い先生達ワイワイと。

私には大体、切目節目か解るのだが「サツパリ解らない」と困つてみえた。やはり能楽芸者でフンイキでのみ込んでスーッスーッとうまく事を運ぶのだけれど、数字とか何とかの話は解らぬのでキツカケここでお酒と云うけじめが解らず、私の方が話のvariety目が解つてフジイさんにアアしてこうしてと言つた事である。能楽堂には大事な三人であつたが、神宮とは始めの中だけでも年も年だったしコヨシさんが離れられて次第に家政婦がとりもつようになつた。

愛国婦人会の幹部でもあつた母や植松さん、陸軍病院慰問加藤良久さんと私大鼓植松（私の下級生）「恐ろしや」を二人でうたい大鼓でハヤシアトは浪曲本番で陸病を慰問。

伊藤杉之助

幼稚園の頃、栄の三越の前伊藤呉服店の頃子供会が正月にあつたが、先代達兄弟で末広

狩などを狂言を出されていた。翁を舞はれた時後見の喜之先生が後で両手を手にそへて人形ぶりの翁をみたが、これがだんな藝と言うのかと驚いた。

内田源兵衛

もしかして御幸本町の或る家に能面が時々替えてかけてあった家と違うか。琴の稽古に毎日通った。幼稚園から小学四年頃までと市一の時も見て通った。能面を見ては通った。

○石井鐘子

笹島駅前旅館志那忠の南、
中区禰宜町五丁目・堀内茂
右衛門の娘

内田フミ子

石井鐘子様

いつしか初夏をおもはせる候となりました先日お電話を頂いて気になり乍ら大変遅くなりましたが手持ちの教育委員会「昭和の名古屋人」よりコピーしましたのを同封いたします。図書館へいつてしらべたらもつとよくわかると存じますがこんなことしかおしらせできなくて申しわけありません。宅は清水の坂上でお一人のとく様は白壁小学校で私より一級下でした。御養子をおむかえになりその方が亡くなられた時に桜菊在園中で三、四人でおくやみににありました。とく様も今はお亡くなりになったそうで石田先生の奥様は八高の英語野崎先生の奥様（白壁町に在住されました）の姉上でお姿はおみかけしたことが有ります。裁縫の平野老先生がよく御存じでした。先生奥様の末妹様の平野先生のお一人の御子息の奥様だったとお聞きしております。

私どもは石田先生にお習ひ出来ましたことは生涯誇りにおもひ嬉しい思ひ出です。他の先生方は気のついた方をコピーしましたが不出来ですみません。

桜菊同窓会には出席したいと思つております。五月一ぱい森村記念会館で宜永先生の遺作展でお能の画（小さいもの）が出ていますが何の番組の画かわからぬと館長さんがいつてみえました。が石井さんなら教えて下さるかと思ひますがまた一度おいで召されたいと存じます。私は第二第四の木曜午後お花を活けに行つて居ります。とりあえずベ々

手嶋 なみ江

平成十六年四月三日

昔の話

今日は白壁町での授業も受け終わり曙町へ行く日です。先生は、今日から舞を始めます、

と言われました。私は躊躇していましたが、先生は舞ふと言うことは、その曲の「シテ」になることです、と言われました。私は前から謡の曲の奥深くに、シテの心の奥深くに近づくには、と考えていましたので、シテになつて、シテの謡、地の謡に舞をつけ、度重ねて何度もくく稽古をしてゆけばシテの心の奥へ近づけるのではと思ひうれしく思ひました。こちらの先生にお世話になれましたのは級友の山田様（別院前）のお陰です。帰り道よくお話をし乍ら栄町を歩いたものでした。或る日、丁度松坂屋の前に来た時、五流能のポスターがはつてありました。以前から「能」への興味がありましたので、この世界を理解するには謡を理解しないといけないと思ふけれど、どこで勉強すればよいのかを尋ねました。山田様は母が稽古に通っている先生があるから連れて行つてあげると言われ、お世話になりました。これは昭和二十一年の五く六月頃のお話です。

吉田和子

平成十年十月二十四日

私がまだ小学校に上らない頃、柳橋の角に名鉄の駅があり、黒いマントを着た父と手をつないで駅に立っていたのをぼんやりとおぼえています。多分あの時は叔母（父の妹）と待ち合わせてお墓まいりに行ったのだと思います。

父がマントを着ている時は私はマントの袖の中に入って歩いておりました。小学校に入学してからのこと寒い日でした。円屯寺通りの豊富館へ映画を見に行き、帰りに映画館の隣の人形店でお雛様を買ってもらいました。父が店の人に、まからんか、まけてくれと熱心に言ふのでとうとう店の人もこんまけしてまけてもらいました。母と私は少しはなれた所で待っていました。どうしてあんな事を言うのだろうと母に言ったら父ちゃんは商人だからだわ、おじいさんは（母の父親）ああゆう事は言わんけど…どうして…おじいさんは

職人だから、ふーん そーゆう事かと思いましたが。その人形も終戦後、父が亡くなってから大家さんが孫の為に、お雛さんがほしいとの事で大家さんに買ってもらいました。

そのお金でラジオを買いました。兄が人形なんか持っているよりラジオの方がいい、日曜日にわ、のど自慢があつておもしろいぞーと言ふのでそれもそうだと思いました。兄は高等科になってから豊国民学校に通学していました。家に友達が四、五人遊びに来た事がありました。皆大きい人達で体格の良い人ばかりでした。皆大きいね、と言ったらほかのヤツと喧嘩した時には助かるんだと言いました。冬の夜、父は火鉢に手をかざして私にお茶の道具を持って来てと言ふのです。私はすなおにハイとはいいません。そしたら私もお茶のむ、いかん子供がのむと頭が大きくなるからいかん、どうして大きくなるの、どうしても、なんで、なんででも、はよーお茶の道具もつて来て、と、この様な会話をあきもせ

ず言っていたな—と思います。

みかんを食べるといつも父は袋は出さな
かん、どーしてなんで、とゆう質問には胃に
袋がひっかかるから出さないと口やかま
しく言うのです。いったい胃はどうなってい
るのだろう、と思ったものです。母に聞けば
食べやあええといいます。

小学校二、三年生の頃と思いますが、父と
母が話していました。田鍋さんの知りあいに
子の無い女の人がいてそこえ上の娘を養女に
やらないかと言われたが、ことわったと話し
ておりました。私はそれお聞いて一人子にな
れるのなら行ってもいい、行く行くと行った
ら馬鹿な事を言うのじゃないと、しかられた
事があります。従弟に一人子がいていつも
色々を買ってもらえていいなあと思ってい
やましいと思っていたからです。

父（秀夫）の思い出 兄（定男）の思い出

父と母は従兄同志の間柄なのです。父は祖
父の後を継ぐ為に祖父母といっしょに暮ら
していたのだと思います。祖父の死後はどなたに
師事していたかはわかりませんが西尾先
生かしらとも思います。計算してみると先生
は父より十五才年上ですから。

父は若いころ京都の谷口様のところで住込
で稽古していた事があると母から聞きました。
祖父が孫である父を謡曲の会につれて行こう
と思っても父が行きたがらないのでそれでは
帰りにはゴムの付いている車（人力車）に乗
せてやるからと言はれて父は喜んで会に行っ
たのだそうです。輪にゴムが付いてないとガ
ラガラと大きな音がするからいやだと言ふの
です。祖母から母が聞いた話ですが小学校低
学年の頃毎日、学校帰りに大勢を相手に喧嘩
してて、子供が喧嘩しとるな—と思うと、そ
れは父だったと言っていました。

昔は堀川の水も綺麗で橋から飛びこんで泳いで遊んでいました。父は田鍋さんの楽器店で俸公していたので別家するまでは祖母と暮す事が出来ず結婚する少し前に店の二階で暫らく二人で暮していました。祖母は秀様と暮せる事をとて心待にして喜んでいたそうです。

結婚して中村区の椿町で所帯を持ち二男三女をもうけましたが次男と次女を亡くしました。

祖母は八二才で亡くなりました。父は長男定男の事を可愛いがり坊々とよんでいたそうです。小学校に入学した時父が心配して坊に学校について行ってやれと言うのでしかたなく母は眠っている私を家に残して一時間目の授業が終わるまで学校にいたそうです。家に帰ると疲れて眠ってしまい目が覚たら私がいなので隣近所の人や不断、附合の無い人までがいっしょになって私を探してくれたそうです。がどこも居ないので皆それぞれに家に帰

り母は、いったい何処へ行ってしまったのだろうと思ひ片方に寄せてあつた蚊帳を、めくると私が汗ビツシヨリになって出て来たのです。それから兄の学校について行くのはやめました。近所の人から母は言われたそうです。あすこの家は昼になつても朝食の茶わんがそのままで布団もひいてあつてだらしがな

いと評判になつてしまつたとの事でした。

私が小学校に入学する前、能楽堂へ行つた事があります。あの時代はまだ五十代か六十代の人と思はれる人が日本髪を結っていました。中村区の家は、お風呂がなく駅の近くの銭湯へ行つておりました。父は私をつれて、お風呂に行きちよつとのすきに私が湯舟の中に落ちてしまい父は、あまりの驚きに体も洗わずに家に帰つて来た事があります。私もお湯の中に浮かんでいる自分、そして父の背におわれている自分を記憶しています。

小学校二、三年生の頃よく映画を見に行き

ました。父が仮病をつかつて店を休んだ時など百貨店に寄ったら田鍋さんの奥様が（奥様ではなかったかも知れませんがとにかく田鍋さんと関係の有る方です）ああ秀さん今日は病氣だと言ってたがもういいのか元氣そうじゃないのと言はれて父は弁解して居ました。あとでこんな所で会うとは思わなんだと言っていました。

夏には海水浴に行きましたが四日市の馬起しと決っていました。四日市には父の弟が住んでいたので、電車に乗って気分よく景色を眺めていたら切符の点検がありました。父は切符はと私の方を見て車掌が言いました。父は買っていないと答えるともう買ってもらわなにかんない。今度からは買って下さいといわれていました。父は私の切符代をけちんだのです。父と母はもう三年生だから買わないかんないなどときまりきった事を言っていました。海に行くとき私を紐のついた浮袋にのせてひっぱ

って歩き回っているだけで父の泳ぐ姿は見た事がありません。

それからどのくらいの月日が過ぎた頃かはわかりませんが父は結核になり店も長い事休んでしまいました。野崎様が（たしか野崎さんだと思います）野間に別荘が有るからそこへ静養に行ったらと言って下さいましたが父は行きませんでした。いろいろ都合があったのだと思います。私が五、六年生の頃には病氣も癒えて店に行っており私はよく店へおつかいにやらされたものです。その頃は戦争も烈くなり食料品が配給になったので父が店で泊る時は、豆腐とか肉など持って行きました。時々田鍋惣一郎様に会いました。その時はいつも壱円とか五拾銭とかいただきました。この人はお金持なんだなーと思いました。父は五銭か拾銭でしたから、そんな頃公会堂へ能を見に行った時の事、能、角田川に一人の幼年の男の子が出演して、あの子誰と父に聞く

と河村さんの子息だと言いました。大人になつてからあの時の子は河村総一郎さんなんだと思いました。

公会堂の帰りに映画を見に行きましたが、父、母、私、妹で兄はいなかった様です。その時の父の服装は皮靴に国民服でした。海水浴に行った時でさえ着物を着ていた父です。初めて洋服姿を見ました。昭和一八年も終りに近ずいた頃兄は戦車兵学校に行きたいと言いつて父を困らせました。毎日火鉢に手をかざして父は兄を説得していました。赤紙が来るまで待つていればいい、ねぎが嫌いだと言つて残すわけにはいかんのだよ、と色々言つてやめさせ様としましたが兄は赤紙が来るまで待つていたら日本わどうなる、と言つて聞きませんでした。そして昭和一九年三月頃中村区から西区掘詰町へ転居しました。母の父親の所です。祖父は印判の仕事をしていました。店の名は清月堂です。西区に引越した

頃、魚住戦車隊長と言つた映画が上映されていました。兄にこの映画を見せたら諦めるかもと父は思つた様です。円頓寺の豊富館へ家中で映画を見に行つたのですがよけいに魚住隊長に懂てしまいとうとう静岡県富士郡上井出村、陸軍少年戦車兵学校に行つてしまいました。入隊後兄からの手紙には希望する通信兵に入る事が出来て嬉しい、いっしょうけん命御俸公しますと書いてありました。そして半年後負傷して病院に入つていると通知があり父は人に頼んで切符を手に入れ静岡に行きました。兄は傷医軍人の着る白い着物でショボンとしていたそうです。

昭和一九年頃父は魚釣が好きになり、あの地震があつた時も釣に行つておりました。田んぼのあぜ道がわれて少しあつた水溜の水が自分の背丈より高く飛び上り恐ろしかったと家に帰つてからも興奮がなかなか覚なかつた様です。

父は魚釣はやめました。その頃の父は黒いカバンを大事に持ち歩いていました。自分が留守にする時は防空壕に入て空襲になつて逃る時は真先にカバンを持出す様に母に頼んでありました。店に仕事に行く時はカバンを持って行き、帰りに又持つて家に帰る毎日でした。父はあのカバンに苦勞しておりました。

祖父は昭和一九年掘詰町で亡くなりました。同年三月父一人掘詰町に残り母と私と妹と三人で刈谷へ疎開したのです。その後、中惣樂器店も空襲で焼けてしまい父も刈谷に來ました。そして豊田に就職しました。舎監という仕事につきました。豊田工機かと思ひますがはつきりとわ記憶がないのです。

終戦となり兄が友達と二人で野宿をしながらリュックを背負つて刈谷へ歸つて來ました。友達は休憩して知立の自分の家に歸りました。兄にどうして負傷したのかと聞いたら戦車と戦車がぶつかつて天蓋から頭を出していたの

で衝撃で下に落ちた、と言つていました。又何日かしてから聞いたら今度は崖にぶつかったと言ふのです。どっちが本当やら……

復員後中断していた中学に又入学して昭和二年卒業しました。兄は高等小学校を卒業後、市役所に就職し、かたわら夜間中学に入学し途中で戦車兵学校に入隊したのです。昭和二年四月刈谷合同印刷株式会社に入社、その頃全国的に感冒が流行して家中が風邪を引きました。そして父だけが亡くなりました。昭和二年四月二一日の事でした。

戦後の生活は困窮を極めました、どの家庭でも大なり小なりそうだったので仕方ありません。兄は負傷した左腕が痛むと言つて又手術のやり直しをしました、なかなか手術をして下さる先生が無く、頼み込んでやつとお願ひする事が出來ました。その日は夜遅くに家に歸り草鞋を履いての帰宅でした。靴は腕に響くので草鞋を買つたと言つていまし

を習っていてその人に拝みたおして作つても
らったのです。

た。刈谷駅から家までは半道の距離があり重い軍靴を手持って歩いてくるのも痛かっただろうな」と母が言いましたので私も、ほんとに可哀想と、その当時思いました。冬になると腕が痛くなるので母が眞綿で腕を包む様な物を作りそれを付けていました。印刷会社に勤め始めた頃は復員して来た時に着ていた軍服を着ておりましたが銭湯で盗られてしまったのです。仕方なく知人に借りて帰つて来ました。母が怒りました。おみやーさんがボケトしとるから盗られるんだ兄も怒りボケツトしとると言つたつて風呂に入とるんだから仕方ない。二人は聲が大きくなりました。平生定男はどこかボケツトしとるからあれの服を盗つてやろうと思われたのに違いな日頃から何を着て行くんだほんとに、と母、兄はだまっしてしまいました。そして暫らくは借りた服を着ていたと思います。叔父の着古した羅紗の学生服があつたので裏替して仕立直して着ていました。同じ会社の女の人が洋裁

昭和二四年一〇月、日本大学通信教育部に入りましたが長続きせずじきにやめました。その頃か、もっと後だったかはつきりませんが西尾先生の所へお稽古に行くようになり私も母も先生の所へ通つているとばかり思つておりましたが先生から葉書が来て月謝はいらないから稽古にくる様にと書いて有りました。母はいつも私に言ふのです。先生の所へお礼に行かなければ：この母の言葉は私に暗示しているのかと思いましたが私は協力しませんでした。五十年過ぎた今日もあの時協力していれば先生に不義理をしなくても済んだものをと思うのです。父が結核になつた時も西尾先生には、とてもお世話になつたと母が言つておりました。兄は印刷会社を退職して二、三年仕事を変つています。それから豊明にある豊ヶ岡農工学院に就職しました。しば

らくして北海道に転勤を命じられましたが折角稽古した事が何にもならないから惜しいといふ事で、北海道出身の友達に変わってもらいました。又ある時は給料を袋のまま落してしまったので家も困りましたが本人も、とてもガツクリしていました。可哀想なぐらい…でも又事件が起こったのです。いつも利用している灯油を買う店が安くしておくからと言はれて農工学院院长とも相談の上、一年分の灯油を買って現金を払いましたが配達されないの店で店に行つて見ると夜逃げしたあとでした。これはみな結婚する前の出来事です。その後、農工学院も退職して坂野病院に就職し今日にいたりました。お葬式の時従兄の石田さんが、定ちゃんとはよく相撲して遊んだとか五銭もつて中村区から大須まで歩いて映画を見に行つた愉快だったといはれました。

○吉田和子

大鼓方吉田秀雄の娘

吉田定男の妹

蔭山朝子

前略

先日は御親切にお電話をいただきまして有難う存じました。生前中、大変にお世話様になつておりましたが、特にその晩年与かりました御好意をととても喜んでおりました。良くは分りませんのでこれだけ送らせていただきますが、少しでもお役に立つものがあれば幸いです。我儘で頑固で美しい女性と甘い物が好きだった水野申三を偲んでやっていただければ有難いことだと思えます。寛様どうぞお元気で益々の御活躍を願い上げます。

七月九日 早々

お能の番組 昭二十六年 観世左近能楽随想
観世左近 昭十六年 桧書店 能楽筆陣坂元
雪鳥

宝生九郎伝 昭十九年 わんや 金剛二号

寺田翁記念帖 大正乙丑 謠曲便覧 明三十

九年 宝生

平成五年七月十日拝受 本紙裏面写真等

(※水野申三による永田虎之助先生についての文章 昭和五十年代)

頑固と「イツコク」の点では、此の先生ほど他にヒケを取らない人はいないだろう。曲がった事は大キライで眞つ正直な人で、或る点では所謂頗る融通の利かない人であつた。私事に亘つて恐縮だが私も先生に輪を掛けたような人間だが、私と違った点は我が儘を通さない事であつた。私が先生の門を叩いたのは大正七年早稲田大学卒業の翌月からで、其の当時は末廣町で毛皮屋を営んでおられたといつても、先生は商売はカラ下手で一切を奥さんが取り廻しておられたようだった。慾の薄い金銭的には恬淡な人であつたので商売に向かないのは当り前だ。私の家は長兄林愿蔵が、素謠に次兄加藤善陸が福井初太郎先生に

小鼓を習つておつた反動で、大皮を永田先生に習う事になつた事と思う。

頑固な一例として、其の当時永田先生が主催しておられた「五雲会」の囃子会の順序を、私の都合で番組面を変更してほしいと頼んでも聞き入れられず、更らに尚をクドク迫つたら怒り出されて、此の会は今日は中止するとトコトコと歸られたのには他のお弟子達がビツクリして懇望して歸つて貰つた事もあつた。先生と弟子の喧嘩は以ての外の不埒(らち)で、当然弟子が慎むべきだったのに私の我が儘が此れを、許さず、二、三度先生に楯を付いた事は若気の至りとは言え当然弟子が慎むべきだったのに如何にも申し訳なかつた事と常に恐縮しておる。兎に角堅い事では、人後に落ちず、融通の利かぬ人だったが、趣味として撞球、碁以外の事は聞かぬ。書画、骨董には一切無関心の人のようだった。

人格者の点に於ては誰れにも劣らず、戸次又一、木造大観、大野慶雄氏などの立派な人

物を育て上げられた事は大したものだが、不幸にも先きだたれた事は晩年の先生には衝撃であり、寂しい事であつたには違ひない。次ぎの弟子であつた私は我が儘ものであつたため当てにならず、其の後継者として若手の人格者筧鉦一君の如き眞面目な堅藝風をもつた弟子を養成された事は、以て瞑するに足ると思う。

お稽古は普通の通りで変つた事は無かつたが、少々難しい能を打ちたいと頼んでも許して貰えた先生は悟り切つたものだつた。

人格的には少しでも非難する事は無い。藝の事に関しては弟子が批評する事は以ての外。の事で私は心から尊敬してゐる。

或るエライ人が能評如きものを、或る新聞に書いておるやに聞くが、私には其んな大それた大膽な度量も無いからお許し願いたい。

最後の締めくくりとして言いたい事は昭和以後にも名人は出るかも知れない。然し永田先生の如き一家の見識を供へてゐて堂々とし

た典型的のお役者の倂を多分に有してゐた藝風藝格の人は決して出まい。段々に器用な人ばかりが喝采されて、しかと叩き込まれた上品な藝は地を払つて無くなるであらう。或る意味から言つて先生は斯界最後の人であつたと考へられても過言で無からう。

○蔭山朝子 水野申三の娘

武藤豊子

平成十年十月二十四日

初めてお手紙差し上げます。

此の度、名古屋能楽史の資料を集めておられるとの御手紙を甥の柴田和也の方へいただきまして、拝見させていただきました。私は柴田善次郎の次女でございました、亡き父の若い頃の笛の活躍を初めて知りまして感無量でございました。

ほんとうに有難うございました。

父が他界して十四年余り、父の残しました能管、竹笛一本は長唄の方の笛を致して居ります。私が大切に使用して居ります。父が亡くなつてからおけいこをはじめましたので父は自分の笛が現在娘が吹いているのを知らずに亡くなつたのはとても残念です。

亡父は笛の事は一度も口にしたことも無く亡母から素晴らしい笛だった由を聞いた事がありました。父の笛を一度でいいから聴いておきたかったと無念でございます。ピアノやバイオリンも引いたそうで、これも私が持っています。

ハーレイダビットソンのサイドカーに丸まげの母を乗せた写真もあり、昔としましてはモダンな人でした。

ご期待にそえる様なことが何もなく申し訳ありません。皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

本名 柴田善次郎

活躍期 大正六年七月二十九日〜大十二年二月二十五日

生年月日 明治二十七年十月十八日

没年月日 昭和五十五年七月十七日 八十歳

流儀 藤田流

師匠・弟子 故藤田六郎兵衛先生

親子血縁 兄 故柴田初太郎 甥 柴田 収

縁者 武藤豊子（旧姓柴田）

寸作

柴田善次郎の孫 柴田和也

垣村重一 平成十三年二月五日

兼ねてお申出の件おそくなりましたが第一部として御報告を申し上げますが、何せ七十年前からのことですので記憶がうすらしておりますが、自分としては真実に近い事を御報告するを自負しております。私は大阪の真中の船場南久太郎町に明治四十二年一月十三日

に生れ現在八十六才になりました。前昨年四月の心筋梗塞で生れて始めての救急車で第二日赤へ運ばれ一ヶ月間の入院をし五月に退院をして来ました。自分では他人さんより少しは丈夫だと過信しておりましたが矢張り八十才を越えますとどこか悪いところが出てきます。それ之も致し方なくあとの余命はまアのんびりと過す考えです。

扱、本題に入りますが大正十一年十一月二十二日に大阪市東区淡路町四丁目住友銀行備後町支店ビルの二階（株）松本商店（毛糸商）へ丁稚奉公を致しました。当時の月給は五円で内二円を店で強制貯金の制度あり残り三円でした。今、考えますと数え十四才（満十三才）現在ならとても奉公は出来ぬ時代です。住込の為メ居住は近くの備後町四丁目（株）松鉄商店へ淡路町より通い朝晩の食事を頂いたものです。奉公した初晩のおかずハ鰯の干物六本と漬物だけでした。十八才の時（大正

十五年）急に名古屋出張所（後に名古屋支店となる）に転勤となり梅田駅より柳行李一個を持ち京都より東へ行ったことない名古屋行きてでした。

勿論急行でなくドンコ（鈍行）のため一駅一駅止まり名古屋駅（今の笹島角メルサのあるところ）へ四時間以上かかり、その当時はのんびりしておりました。駅は梅田駅出発の後『ジュウキチ○ジ○フンタツムカヘタノム』の打電あり先輩の加藤典氏が出迎えにより市電で広小路にて下車（今の東海銀行本店のところ）で当時は中村呉服店で後のナカムラ）で鉄砲町二丁目にある民家の名古屋出張所へ夜九時頃に着き名古屋のものになりました。

十八才と云っても丁稚ですから朝早くから店内の掃除に追れ辛かったです。名古屋店は総勢四名で中村支配人、会計の小木曾さん、加藤さんと私の四名で独身者は加藤さんと私の二人が住込みあと二人は家庭持ちの為、通

勤しておられました。食事は女中さん（おばアさん）が見え三度の食事を頂いておりました。

名古屋店で十五年間大阪店で四年間、始めて十八年間勤めて卅才で退店して毛糸ブローカーとして独立しました為メ、月給は入りませんので自分で稼がねばならずそれも一苦勞でした。

卅二才より退店する迄津島町（現在の津島市）へ七年間名岐鉄道（後の名鉄）柳橋―押切―津島へ毎日毎日機屋へ商売に出かけいろいろと商売の道を学びました。昭和四年は兵隊検査あり本籍地の大阪より名古屋へ寄留して東別院の近くにある寺（寺の名前は忘れしました）にて検査をうけました。結果第一乙種と決り現役はのがれてヤレヤレでした。

其の頃上の番頭よりうたひをやっております前もやれとの一声で千早町にありました平野清先生（大槻十三師の一番弟子）に鶴亀、船弁慶、大佛供養、竹生島、紅葉狩、田村、桜

川と習ひましたが月給十五円からの月謝二円五十銭は痛くそれに正座の為に脚が痛くチョット諦めの気持でとうとう『桜川』途中で決断でやめて終いました。十八年間の在職中には大くの機屋さん毛糸組合の仲間、友人が集まって毛糸組合の丸紅、遠山、松本、平松、岩井、川越、安宅、高島屋他鬼頭五郎さん等月一回廻り持ちで集まり謠会を開きました。それから又『桜川』をやめて又入門して布池町の能樂堂で初めて舞台で『東北』シテをうたわせて貰ひました。

又昭和四年平野先生につきました時ですが七間町（呉服町か？）の能樂堂（少しうす暗い会場でした）で林先生『盛久』のうたいをお聴きしなるとうまい人だなと感服を致し最後は平野先生の『望月』の能を拝観させて頂きました。何んでも頭上に扇子を重ねて舞れたやうに覚えていますが…。

津島の料理屋で鬼頭五郎さん主催の謠会で

『八島』のワキを謠わせて貰ひましたが面白
いおかしな謠をうたっていたものと思いまし
た。昭和十四年に結婚し長島町の借家（家賃
十六円）後一ヶ年半厄介になりましたが家主
の息子さんが帰って来るので昭和十五年に
東山動物園の北方鹿子殿町へ引越しました
（家賃卅五円）翌十六年夏に応召来り三十三
才にて大阪の堺市の假舎（小学校）へ一時入
隊し二週間目に堺より大阪築港まで夜中行軍
し八月十九に築港より北嶺丸出港。四日後日
満州大連港へ上陸しました後、復員迄満五ヶ
年目中支へも参り終戦後の昭和卅一年六月に
満五ヶ年ぶりにて山口県仙崎港へ帰ってきま
した。其の五年間いろいろなつらい事楽しい
事余りなくただ早く一日も内地へ帰国したい
ばかりでした。

富士道周明

平成十三年十月二十三日

私の母（鈴）は服部寅雄の九人兄弟の長女
として生れ、父（寅雄）より先祖の言傳えと
昔話しが好きな仲であつたと思ふ。

私の母（鈴）の話によると金城女学校の土
地は服部家の屋敷でしたと、傳へられ（約五
百坪ぐらい）曾祖父の少年時代には野村様の
曾祖父の友で、徳川公のお小性を勤めていた
と聞かされていました。

野村二郎先生は銀行にお勤でした。背の高
い方で仲々の美男子であつたと思つた。謠の
声も美声で、もの静かな方でした。私の母に
つれられ、兄と一しよに習い始めた。私の兄
（清）小鼓も習い当時は和紙に拍子線を作り
自筆で先生にお教へて頂いたものです。長兄
が中学五年ぐらいで、私が小学生三年ぐらい
でした。私はそばで、聞いているだけでした
ので何だかよくわからなかったが、謠が何と
なく、声が力強くて元気が出てくる氣持にな

った事でした。当時は、チャンバラ（活動写真）が遊びでした。本題の野村先生ですけれど、長男が建築家でしたので、大変絵が好きでしたので良く能画を書いたりして見せて下さいました。一枚だけ、私の手元にありました。野村先生の孫さんと私が白壁小学校で同級生でしたので私とは仲良くして頂いていました。中学に入る頃お父上の仕事で東京に移りました。二郎先生は奥様とご一緒でしたのでけいこはしていました。兄は学校を卒業してまもなく、軍人になって、出征となり謡も出来なくなり終戦になり、生活もメチャクチャになり、これではと思いい母が東区東片端町に「高之瀬先生」に習ったらといって兄を連れてお願ひに行きました。私はまだいけません：と言われたのでその時は誠に残念と思ひ兄の謡を聞いて居るうちに謡が習いたいという気持が出て来ました。

私は松坂屋の家具工場、誠工舎に勤務となり、設計部に入社、それがどこかで謡が習い

たい思ひ、ふと「古董」屋さんに入った時に謡教授と看板が掛けてあったので、これとは思ひ、お願いしました所、よろしい、家も近かったし私も桜山に住んでいましたので、丁度、良い先生に巡り合ったと思ひました。

「結野先生」は元海軍大尉の軍人さんで退官後古董屋を営んでいました。家が近いのですぐ夜、おうかがいしたら、その先生がもう二人謡の好きな人が見えますのでと言われたので、お会いしたのが名古屋フアニチャーKKの大谷社長さんでした。君はどっかで合った人だなあーと言われ私は誠工舎の設計部に勤めていますと言う事になり、大谷社長さんとは家具屋同士でと言ふ事でお知り合いになり、先輩としてよく指導して下さいました。

結野先生はそれから三年後、没し皆様方と謡が出来なくなり一人淋しく思っていました。私もどこか稽古先はないかなと思っていたら、同門の日本陶器にお勤めでした、柴田さんが殿島先生を紹介下さって。「おふくろ」といつ

しよにお願いに上がった次第です。三角堂の二階和室で一人でした。先生は私が会社で残業ですがとTELすると夜十時は待つとるかとの事、私は先生に申しわけないと思ひ、仕事がすみ次第稽古して頂き、あの時を思うと先生に心より感謝致しています。番数は少ないですが、謡曲の素晴らしさ又奥の深い芸術を教へて下さいました。

結野先生 昭和二十年四月 謡 習ひ始め
殿島修二先生 昭和二十四年一月 謡を習

う
昭和二十七年一月 仕舞を習ふ

田鍋惣一郎先生 昭和三十四年 小鼓を習

ふ

金森準三先生 昭和三十五年〜四十二年没
まで笛を習ふ

笥三男先生 金森先生没後、まもなく殿島先生のお世話で笛を習へとおゆるしが出来ました。

鬼頭喜太郎先生に太鼓を習ふ

吉田定男先生 大鼓

鹿取先生に笛を習ふ 現在に致る（笥三男先生没後）

昭和二十九年一月十五日 清韻会 松坂屋ホール特設舞台 蟬丸 ツレ田波省三 シテ大谷一三務 ワキ伊藤 硯

昭和三十年一月十五日 清韻会 松坂屋7Fホールにて 櫻川 網之段 地 水藤元三

宇治正夫 殿島修二 伊藤 硯

昭和三十一年一月二十二日 清韻会定期大会
熱田能楽殿にて、仕舞シテ巻絹

○伊藤清

若宮神社東側本町筋で富士道木工を経営

佐藤英雄

平成十三年盛夏

思い出すままに

戦後の復興も漸やくその緒につき人々は生活に不安をかかえながらも各地で文化的な催しが僅かながら、行はれるようになりました。昭和二十五年春に勤務する会社で謡曲の同好会が発足しました。指導に來られたのは觀世流シテ方師範の加藤錠太郎という先生でした。この方のおうちは代々能楽囃子の太鼓方の家柄でご本人も名古屋在住の太鼓方觀世流職分野崎光之亟先生に師事せられ太鼓方としても独立できる段階まで稽古をつまれましたが途中よりシテ方に轉向せられた方です。会社では厚生会館の日本間（六帖程度）にて一週間に一回午後五時よりの稽古にて大抵数人の連合稽古でした。私は昭和十八年頃矢張り会社の先輩と一緒に暫くの間謡を稽古したことがあり戦時中中断しておりましてので早速この同好会に入り謡の稽古を再会しました。

しかし会社の勤務後の稽古となりますと仕事の都合で偶々稽古日が出張となり続けて稽古することができないことあり又特別に興味らしいものがない私としてはこの際少し謡曲でも続けてみようかという軽い気持で先生のお宅へ稽古に伺うことにしました。当時加藤先生のお宅は御幸本町通りを東別院より熱田神宮の方へ南へ行つた伊勢山町にあり戦災を免れたお宅で所謂名古屋の町屋風の造りで開口が狭く奥行が深くて玄關を入ると通し土間で左側が居間右側が水屋（井戸お勝手風呂場等）で一番奥に庭があり庭に面した六帖間が稽古場でした。お店は乾物商を営んでおられ先生が仕入、奥様が販売を受持つておられました。お宅へ伺うようになって一年程経った頃「なにか鳴物（笛、小鼓、大鼓、太鼓）をやってみないか」とのお話がありました前述しましたようにもともと囃子のできる先生でしたので自分の謡を教えている社中で囃子組をつくらうというご希望があつたようです。そこで

私は肺活量がありませんので笛は無理だと思
い太鼓を選びました。最初は先生が太鼓も締
めて頂きこちらは太鼓の「イロハ」を打つだ
けでした。御承知のように太鼓は右左均等に
音がでることが大事ですが普通の人は右利き
ですので左揆が適格に揆皮にあたらず苦心し
ました初心者の稽古は独鼓で杜若のキリ「袖
白妙の…」猩々のキリ「よもつきじ…」羽衣
のキリ「東遊の…」鞍馬天狗のキリ「そもそ
も武略の…」等々でした。伝統芸能の世界は
取決めがむつかしく公開の場にて発表する場
合には正規の手続きを必要としますので加藤
先生のお進めにより野崎太郎師（前述野崎光
之亟師の御子息）の許に稽古に参りました。
野崎先生の稽古場は熱田区金山神社の社務所
にあり先輩には小田井様久野様（宝生流）村
田様鈴木様（観世流山本博之社中）がおられ
ました。そして昭和二十九年一月に野崎先生
の御取次により観世流家元観世元信師より入
門許可を頂きました。其の後熱田神宮能楽殿

にて正楽会（加藤先生の社中会）の際能「竹
生島」「羽衣」「鞍馬天狗」「土蜘蛛」等を野崎
先生の後見にて勤させて頂きました。

今一人私の太鼓の稽古のうえで申し述べねば
ならぬ人があります。その方は囃子笛方藤田
流職分の笥三男師であります笥師はご親戚に
戦前戦後を通じて名古屋能楽会の重鎮として
活躍せられました柴田初太郎氏の関係にて学
生時代より能楽の道に入られ戦後は叔父上金
森準三氏（笛藤田流職分）の推挙により藤田
流家元十世藤田六郎兵衛師に師事せられ早く
より藤田流職分となり名古屋能楽会の一員と
して活躍せられた許りでなく関東関西の諸先
生方とも交流せられ海外の演能にも参加して
おられました。当時はまだどの部門にもまと
まった指導書と呼ばれる出版物がなく先生の
云はれる手配りを記録して稽古をしておりま
した

が昭和三十三年二月藤田六郎兵衛師が
「藤田流笛唱歌集」を刊行せられる際には内
弟子として家元を扶け、編集に校正に格別の

盡力をせられ立派な唱歌集を発刊して流儀の発展に大いに貢献せられました。私とは中学専門学校と同期（愛知一中より名古屋高等商業学校）にて私がこの道に入ってから「手取り足取り」という言葉の通りこの道の先輩として指導を頂きました。私もまだ現役で会社勤めをしておりましたので時にはサボることがあると直に自宅の稽古日に呼び出しがありました。そして、節目節目には先生方に段取りをつけてお骨折りを頂きました。昭和三十五年九月重習「猩々乱」（シテ観世流佐藤太俊師）を笛篁師後見野崎師にて勤めました。其の後勤務の都合で暫く名古屋を離れ空白の期間がありました。昭和四十五年に再び名古屋勤務となりました。からは篁師の稽古日には自宅へ伺いお笛のお弟子の相手をさせて頂きました。私にとつてはこの期間の稽古が大変良い勉強になりました。そして昭和五十三年九月に大曲「石橋」（シテ宝生流衣斐正宜師）を笛

篁師後見観世元信師の許に披くことができた

した。この際にも篁師には各先生方の日程を調整して頂き数回の申合せの機会をつくって頂きました。

篁師は先代家元がなくなられた昭和五十四年よりは若い当主家元の後見として流派の会「龍吟会」を主催せられる傍ら各地の演能に参加せられた。また弟子の養成に高山下呂西尾を初め各方面に出稽古にと流派の興隆に努めておられました。昭和五十六年九月病氣のため六十一才の若さで現役を隠退せられました。

当時の名古屋能楽会としては重大な損失であり私としましては大きな支えを失って残念という以外に申す言葉もありませんでした。同期の桜は有難いもので私が今まで途中挫折することなくこの道を続けてこれましたのも全く篁師があつたればこそにて時には厳しい批評も頂きました。が前述「猩々乱」の稽古の際には達筆にて乱の唱歌を書いた小冊子を頂きました。現在も私の貴重な一品として座右にございます。齢八十才と相成り時には能楽堂

へ出向き楽しい一刻を過すことのできますのも手ほどきもして頂きました加藤師そして根気よく育てて頂きました筧師この両先生があらばこそにて唯今厚く厚く感謝を申し述べてこの思い出の記の筆をおく次第であります。

大森英三郎

平成六年三月九日

御無沙汰しておりますが相変わらず発展・活躍のこと慶祝に存じます。

物質文明に飽き、もう一度脚下照顧し直して先人の残した心中文化や歴史を掘返そうとする機運が各地に起こりつつあること心強い感じです。

名古屋でもお城能楽堂建設工事のスタートを契機に、近代名古屋能楽師をキッチリとまとめ後世に残したいとのご計画、まことに時宜を得たことにて心から敬意を表し、その

完遂を祈念します。

ただ、愚考いたし眞するに、たとえデータがかなり揃っていたとしても、活字にして一冊の書物にまとめあげること、これは大変な努力の継続と協力が要請されるところです。幸ひにも戦後から今日まで舞台歴五十年以上に上る鉦一先生はじめ河村、福井、後藤、鬼頭、助川：など錚々たる囃子方が現役ですし、笛方では藤田流宗家、鹿取、大野とつづいておられます。狂言方も又三郎や友彦師が「やるまい会」はじめ中京の狂言界を支えておられます。

ワキ方は高安流家元、存外早く世を去られ、欽也師もお城能楽堂の完成をみず他界されたこと、残念なことです。

シテ方は名古屋生粋の能楽師は私には不詳ですし、喜多長田師、宝生衣斐師などは昭和三十年後半からの活躍ですから古事の記憶データーなど如何かと思っております。

昭和三十年頃在京九臈会職分の出張教授を

受け趣味としてスタート。昭和四十五年頃本務の多忙さで謡曲・囃子をやめました。従いてご照会いただいた事項については、往時茫々、お役に立ちそうなデータは持合わせておりません。きかせて戴いて却って有難いなどの思ひでおります。

只、三男先生に取立てていただいた笛の免状、小鼓の免状などは死出の土産に保存しております。昭和三十三年わんや刊、田鍋惣太郎師「小鼓芸話」は本棚のすみに残っておりませんがこのことについても鉦一先生先刻承知のことと存じます。

頂戴した第一次名簿は昭和二十六年までのこと、懐かしい先生方の没年などの判る第二次、第三次の名簿、待望しております。

○大森英三郎 津市在住 鈴鹿高専教師
昭和三十九年―四十四年の間、藤田流笛方
として能楽協会名古屋支部員
寛三男の弟子

水谷治郎

平成十三年七月二十日

何かとお世話になった大倉流大鼓方の、鉦一先生より、能楽殿勤務中に印象に残った想い出話を何か書いてほしいとの依頼があった。小生も無精者で当時の日記も克明に記していないので明確に覚えていない。従って何を書いていいのか聊か至難に思った。しかし切角依頼されたから何か書かねば男じやないと奮起一番応ずることにした。能楽関心のなかった私に勿論能舞台の管理が全う出来る筈がない、が私なりに誠心誠意努めて来た。そうした中で思案に暮れる日々が多かった。能楽師の方々も人夫々で意見の食い違いも多い、舞台について一例を上げれば、或る師は滑り過ぎる、又の師は滑らないので摺り足がしにくい、又雑巾掛けは綺麗な水で何回も取替えてするようにとか、能舞台は黒光りの方がよい、濁った水で汚れた雑巾でよく擦るのがよいとかその他諸々で枚挙に暇がない。遂には

居直つて我が意のままに通して来た。(時には不躑ながら口論じみたこともあった。)そんなこんなで色々あったが、終りに一言、能楽師の諸先生は固より能を嗜む方々の礼節を頑なまでに重んじておられる姿に敬服し、脳髓深く印象に残っているのは事実である。我が人生のページを飾る貴重な体験であったことを感謝している次第である。

○水谷治郎 熱田能楽殿勤務 初代鈴木氏、二代目仙田氏に続く三代目

片山九郎右衛門家より

平成六年四月九日

観世流準職分 国枝照清 本名 小市
岐阜県大垣市本町二の六
家業 繊維販売業

明治十九年二月二十日生

昭和四十一年五月十六日没
大垣観水会 豊橋観水会主宰

師 観世元義先生、杉浦義朗先生

業績

昭和二十八年 豊橋市龍拈寺内の八代観世左近大夫、御霊屋を改修、開光式典に二十五世宗家、元正師、片山・杉浦両師御臨席
昭和二十九年 八代観世大夫追善謡曲会

小島英幸

岐阜県出身観世関係者をまとめましたのでお送りします。

飯尾保太郎

明治三年十一月三日生

岐阜県稲葉郡加納町(岐阜市加納) 渡辺宇三郎家に生まる。

二十歳、岐阜県本巢郡一色村身延 飯尾平之助の養嗣子となる。

三十歳、片山九郎三郎（観世元義）に師事
大正十一年、観世流謡曲職分

昭和十七年六月二十日没（七十三歳）

連絡先 岐阜県本巢郡糸貫町身延、飯尾誠太郎（保太郎、孫）

飯尾義之

明治三十二年一月二日生

岐阜県本巢郡一色村身延、飯尾保太郎長男

六歳、初舞台（子方）

二十歳、武田宗治郎・太加志に師事

観世流師範

岐阜地方在住唯一の立方（当時）

昭和四十五年一月十五日没（七十二歳）

連絡先 飯尾誠太郎（義之、長男）

国枝照清

明治十九年二月二十日生

生家、岐阜県大垣本町刺繍店
杉浦友雪に師事

昭和十一年、観世流師範

昭和三十七年、観世流準職分

昭和四十一年五月十六日没

連絡先 国枝浩（照清、孫）

中野寛兵衛

明治二十五年生

生家 岐阜県高山町（高山市）味噌醬油醸造

村半

最初、宝生流謠を習う

十九歳、観世流に転向（師、上木甚四郎）

昭和二年、東京へ移転

橋岡久太郎に師事

観世流準職分

昭和四十五年十二月十三日没（七十八歳）

連絡先 橋岡滋観師が御存知かと思いません。

早川輝吉

明治十三年十二月二日生

岐阜県本巣郡網代村上鷗倉、箕浦九十郎三男

明治四十二年、網代村秋沢、早川こと、と結婚、早川家に入籍

別名 早川子竜（京都観世句会）、早川樵雲（書

道）、仙松齊一薪（花道）

武田宗治郎に師事

昭和二年岐阜市へ転居（名古屋観世会）

昭和二十四年長男早川正己宅（京都市早川医

院）へ移転（京都観世会）

昭和三十六年四月十没（八十二歳）

連絡先 早川征生（輝吉、孫）

○小島英幸

岐阜大学元教授

平子稻美

平成七年九月十一日

「内藤鎧造先生の思ひで」

内藤先生に謡のお弟子にとお願ひしたのは、今から七十年位前のこと、布池能楽堂楽屋が稽古場週一回通ひました。是より以前当時保能会による催能あり、其都度能楽堂に（呉服町にあり）行き先生のお能は拝見しておりました。或年弟子達に、無本で謡ふことを覚えよと言われ、翌年の正月謡初めに羽衣、小袖曾我、を謡ひました。絶句の心配ある人は本を見よと言はれ、前に謡本を開けている人もありました。先生は温厚誠実、物静かな方でした。

保能会で「望月」を出演されたとき「子方」は小川敬介氏（教授嘱託者）、子方が羯鼓打ち了えて、後シテ獅子の出、異形の獅子頭の姿に熱心に最後まで息の詰まる思ひで、観能した覚えがあります、先生は晩酌がお楽しみで、或年の秋「霞網」で捕かくした渡り鳥、鶉を

三、四羽お届けしたことあり、次のお稽古のとき、焼鳥の旨まかったこと日本一だったと、御機嫌の良かったことも覚えております。

稽古進んだ頃弟子達に、無本で謡ふことを覚えよと言はれ、翌年の正月謡初めに、「羽衣」「小袖曾我」を舞台で謡ひました。

絶句心配ある人は見本でもよい、と言はれ前に本を并いている方もありました。

又先生の「鉢本」のお能を拝見したことあり、堂々たる聲量に、立派な「佐野、源左衛門」であつたことも覚えて居ります。其中に戦時となり稽古はお止めになりました。

近藤宗光

平成六年四月七日

『近代名古屋の能楽を支えた人々』刊行に当って資料提供のお願いの印刷物をいただきました。

資料の蒐集、参与した関係者の発掘など大

変な仕事ですね。小生能楽については知識に乏しく、戦前布池の能楽堂に一、二回出かけたり、知人の内藤泰二さんを通じて熱田神宮能楽殿に出かけたりの程度で、とてもお役に立ちませんが、同封の名簿の中で谷口茂三郎さんについては、左記の人が一門ですのお尋ねになれば、かなり詳細にわかるのではないかと思います。（小生の教え子です）

谷口 宰 昭和二十年下飯田小学校卒

郷土史家

同気会関係では青山桂子さんは、寛さんのご親戚で、すでにお話し合いがあつたそうですね。堀江勤之助さんは、能に関する著者（共著）もあり能舞台の絵（大和絵）も若宮神社などで描かれておられますね。

同封にて昭和六十三年九月十五日熱田神宮能楽殿にて内藤泰二さんが名古屋市芸術特賞受賞記念公演をされました際に招待を受け出かけました際の撮影の写真ですが、お役に立

つかどうかわかりませんが送ります。この時
内藤さんの著書一冊をいただきました。

同気会も来春二月に創立二十周年祝賀会を
挙行する予定ですので、その折にはぜひご出
席ください。

谷口宰の手紙

私の父が書き残したメモです。

崇徳閣

谷口茂三郎

野砲兵第三聯隊陸軍中尉として日露戦争に
出征キンシ勲章を受ク

西春日井郡郡会議員

能と俳句は宗司級

能は宝生流 はいく（俳句）はばせう（芭蕉）
の流れ

岐阜県羽島の 清年宗匠に学び自らは春晴吟
社と称し同人を指導した人。

大脇平三郎

姉は茂三郎の母

父鉄藏（鉄藏は和算の大家）の子平三郎が十
五、六才の時、父が重い病氣にかかったので
子供の平三郎は毎夜二時に熱田神宮に日参を
つづけた。或る夜神主が不審に思い平三郎に
理由をきいたところ父の病氣平癒を祈ること
を思つて孝心の深さに神主は感激したのであ
る。

奏禪師

聴松（松ニ聴ク）

如月や病める歌の師辞世詠む 北子

春の宵に俳またも夢に入る 北子

なお、辞世刻銘の石は、横井貞晴氏の家の東
側に架けられた石板の橋を谷口道義が譲り
受けたものである。「傘樞随筆」「わが家の記」
「尾張源氏」の著がある。

附 有終館の前、東側の灯ろうは谷口茂三郎

が大正七年三月に奉獻したものである。
有終館の碑の東隣りの自然石の灯ろうは城東
耕地整理以後 第七工区関係者が昭和十四年
十二月に奉獻したものである。

七位勲六等功五級

谷口茂三郎 明治十年三月二十六日生

大正、昭和にかけての下飯田を指導した偉大
な貢績を残した人である。

谷口宮次郎の残した城東耕地整理を完成さ
せたのも茂三郎である。現在六所社 社務所
前に「有終」の碑が建っているが、耕地整理
完成を記録したもので茂三郎の撰并書による
ものである。但し上部の「有終」は愛知県知
事田中広太郎の書である。

下飯田の連合町内会長として、また陸軍砲
兵中尉の軍人でもあり在郷軍人会長として、
下飯田から出征する兵士を必うらずひとりひ

とり六所社で激励して送り出した。また郷土
史家として当時屈指の知識をもち漢詩、和歌、
俳句等文人としての才能のみならず朗々と詩
吟を唱う多芸も兼備した人である。

昭和三十一年十一月二十六日午前五時死亡
下飯田の偉人は去った 忠源良茂居士

現在成福寺本堂前西隅に辞世の句碑が建てら
れている。

うつし世の夢白菊を抜けて消え 茂

昭和三十六年秋建之 春晴吟社

刻石匠 大口良助

春晴吟社は谷口茂三郎を中心に結成された俳
句の会員中である。

谷口茂三郎氏手向句として会員の谷口道蔵は
句集「草の穂」で残している。

高橋秋子

平成六年四月二十六日

能楽協会の諸事業につきいろいろ御尽力を

頂き御苦勞様でございます。妹の所へ御手紙を賜りましたが、先般鬼頭嘉男様より私どもの所にも御電話がありました。実は残念乍ら昭和六十三年に家を改築の際、大分処分したものがございましたので、古い番組等殆ど残っておりません。僅かに残したノート類の番組控え等が御役に立つかどうか分かりませんが家も近い鬼頭様に御送り致しましたので何卒寄敷く御願ひ申上げます。

本名（別名） 高橋鑄三郎（とうさぶろう）

生年月日 明治二十三年四月六日

没年月日 昭和五十七年一月十六日

九十三歳

流儀 宝生流

所属団体・会名 名古屋宝生流研究会、宝生

流囑託会東海支部

職業商売 東海銀行員

役職屋号 各支店長、開発課長、検査課長、

審査部長

特記事項 昭和四十七年四月宝生宗家九郎師

より皆伝の免状を戴く

最終学歴 名古屋市立商業学校（CA）

縁者・当主等 高橋秋子（二女）神藤鉀子（三

女）

○大正二年名古屋銀行（現東海銀行）員で名古屋宝生流研究会員であった森島信三郎氏の手ほどきを受け、その後同氏のおすすめに従い、当時広小路にあった静観堂書店主、大鼓の戸次又一氏の御指導により小鼓等の稽古を行う。

○昭和五十四年一月号雑誌「宝生」誌上わんや編集氏と対談を行う。

○名古屋宝生流研究会世話役、宝生流囑託会東海支部相談役

○高橋秋子

宝生流世話役

高橋鑄三郎の娘

松田よし子

平成七年八月五日

トヨタ自動車の謡曲部 昭和二十二年四月創
部 講師 畑富次先生

当時のメンバー 楠 兼敬 岡野 威 故江崎
秀夫 三田省吾 故伊東郁郎

昭和二十六年五月二十七日

トヨタ春季謡曲大会を開催

昭二十六年十月

秋季大会を開催する

以後毎年会社の文化祭として発表をつづけて
いる。

この頃より囃子（四拍子）のけいこを始める
（畑先生）

昭和二十七年

発表会にて初めて舞囃子「田村」「羽衣」を發
表する

この頃部員数五十名にもなり班を分けて（A・
B・C・女子）練習する

また、畑先生の同門、東海富宝会に参加、次

後、毎年春秋に謡、仕舞、舞囃子等を發表す
る

昭和三十一年十一月

文化祭にて袴能「猩々」を發表

シテ 三田 ワキ加藤

大 江碕 小 伊東 太 田代 笛 松村

昭和四十一年

第一回 トヨタ関連会社謡曲大会を開催

毎年幹事会社を交替して平成七年で三十回目
を開くことになっている。

畑先生のご病氣により豊田までお出で願うこ
とはごむりになり月一回先生のご自宅までマ
イクロバスで練習に通いました。囃子のおけ
いこは中断

昭和四十三年六月

自動車産業人総合文化祭（東京読売ホール）
にて舞囃子「船弁慶」を發表する

昭和四十四年以後六十年まで

本間先生に月一回のご指導を受け、東海宝英
会にも参加する

昭和五十三年より囃子のけいこを再開しましたが、(寛先生)平成二、三年頃より個人的な事情もあり消滅状態
六十一年より内藤先生のご指導をうけ、現在は稲川先生

○松田よし子 トヨタの謡曲部員の纏め役、宝生流で能も数番舞われた

大川嘉奈子

平成六年六月九日

伊藤鉄之進

明治三十五年二月十六日生 広島県出身 昭和四十七年四月九日没 七十才

戦前 メリヤス製造卸 伊藤鉄之佑商店 前は水主町に住む 戦後 料理旅館 山泉営業

金剛流 梅田天瑞 昭和十一年頃から 豊島

弥左衛門 戦後

中部金剛会

能、芦刈 鞍馬天狗 船弁慶 田村 羽衣等
勲五等、雙光旭日賞 正六位二叙ス

○大川嘉奈子

旧姓伊藤 金剛流伊藤鉄之進の娘

伏原靖二

平成十三年

述懐

本田さんの謡いは、まさに、神品とも云うべきものであった。それにつけても思い出されるのは、杉並能楽堂での能、「芭蕉」である。「芭蕉に落ちて松の声」という次第に始まり「あはれ昔の秋もなし」と云う小謡で結ばれるまで謡いが、まことに、素晴しいものであった。淡々と謡う中にも、深沈たる風情があつて、格調の高いことは、ご光がさしているほどに有難かつた。

金春信高 昭和五十三年十月

述懷二

本田さんは、生前、しばしば、「光洋をよろしく頼みます」と云い、また、「基礎だけは、みっちり、叩き込んでおきますから」ともつけ加えるのであった。光洋君は、父君に似て芸熱心で、よく自己の素質と才能を伸ばし、今日のような立派な能楽師に成長した。

金春信高 昭和五十三年十月

秀麗会の昔のこと

私は本田氏の「道成寺」を二度見た。一度は鐘に斜めに飛んで入る型で、二度目は真直ぐに鐘の下から飛んだ。まだ暑い夜の水道橋能楽堂で、乱拍子の間の静寂を縫って、近所の夜間学校から、トランペットで「上を向いて歩こう」のメロディが朗々と流れてきたのには閉口した。本田氏はそれにかまわず、美しい鐘入りを果たした。

長尾一雄

本田秀男の演能日記

昭和四十一年二月二十八日、一瞬の心臓破裂のために、本田さんが永遠に能から別れ去ったあと、達筆の細字でびっしりと埋められたノートが残されていました。

それは、戦後最初の演能「景清」（二十一年二月）から始まって、逝去直前の最後の舞台に至る迄の二十年の間、一番一番、能を舞うたびにこつこつと書き留められた、演能の内心の記録であります。（戦前の分は戦災で失われたようです。）
能評家 故河野由記

名古屋金春会での道成寺

次第から道行までは昨年の時より、自分としては確かであったように思った。急ノ舞から中入までは身体がとても楽であったが、鐘入りは今までのうち一番いけなかったように思う。（中略）弓川師の死（昭和32年3月没）に会って初めての大能で、一

応無事に舞い納めた事を先師（桜間左陣、弓川）お二人に御礼申上げたい。

本田秀夫の演能日記から

昭和三十二年四月六日

最後の金春会で「実盛」を

全体として今までで初めてと云っていい位に気合が入ったと思う。師匠（弓川）にくらべるのはおこがましいが、私としてようようその域をさとり得たかと思う。（中略）ただ、謠が今ひと息、息が十分でないのが残念であった。いま一つ身体を治さねばならないと思う。

本田秀男の演能日記から

昭和四十年十一月二日

本田秀男 略記

○明治三十二年、熊本に生れる。

○大正四年、十六才、明治の中興三名人の一人、同郷の桜間伴馬（左陣）に誘われて

上京伴馬とその子金太郎（弓川）のもとでひたむきな能一途の道をあゆむ。

○大正・昭和の金春流の重鎮として活躍し、新修謠本の節付け校訂などにも貢献。

○大戦後、昭和三十年より、各流の名手を招いての秀麗会能の公演に全力をそそぎ、同時に、稀曲、廃曲の研究にも取りくんで「鶏竜田」「源太夫」などを上演した。

○昭和四十一年、親友、山本東次郎（先代）の三回忌に「江口」の能を舞う抱負を語りながら、二月二十八日、動脈瘤破裂のため急逝。

はじめての稽古

昭和二十五年の春、高一の時にはじめて仕舞「田村クセ」の稽古を受けました。本田秀男先生は、お弟子さんが増えて、毎月名古屋へ来られるようになり、二、三泊我が家へ泊まれるので、日曜日の朝などは、まづ私が標的になったのだと思います。その後、受験勉

強というのは口実で、クラシック音楽やら英会話やらへ走り、妹達が仕舞の稽古を初めましたので、私は赦免となりました。

さいこの稽古

昭和三十六年にドイツから帰国し、再び稽古をはじめました。お弟子さんの長老、小沢利左エ門さんは、時折しか姿を現わせませんでした。河村恒三、後藤正男、林鉄郎各氏、三羽鳥で全盛期でありました。東海銀行、トヨタ車体などの会社グループでも謡の会が開催されました。熱田能楽殿での「砦」の能の地謡の一人に私も出演しました。この為の稽古が多分最後の稽古でした。

○伏原靖二 現在金春流世話役 父順四郎

大原紋三郎

平成五年十二月二十六日佐野正吉氏より

川村類造先生

類造先生は新城市本町の川村嘉平の長男、慶応二年（一八六六年）に生まれ農業の傍ら雑貨商を営んでいた（家敷は現在孫娘が居住している。）

新城は昔から能が盛んであったから、幼少のころから子方ツレ等に出勤していたと思われるが記録は残っていない。

ワキ方としては新城に保存されている富永神社祭礼奉納の能組によれば、明治十七年の“巴”に出勤したのが初舞台で、以来大正を経て昭和四年の“羅生門”まで毎年出勤の記録がある。昭和十年嵐山に特別出勤したのが最後で実に五十一年間に及んでいる。

この間芸道精進によって明治二十六年の九月高安流学頭後見職の西村敬光から“船弁慶

船中の語り”外全小習一式“替装束”の伝授を受け、また同年“和布刈”の組から“蟻通”までの許可書を受け、さらに大正三年二月十日には高安流の免許皆伝の書を授けられた。これは川村家保存の家元から受けた免許書及び伝授書によるものである。免許書等はこの他にも数多くあつたことと思われるが、現在、同家に保存されているものは右の三点だけである。

永年ワキ方の指導育成につとめられ、引退の後も催能の時には必ず装束着けをはじめ、後見を勤められた。指導を受けた主な人々に伊丹富三郎、小林孝之輔、鈴木庄吉、今岡精一、菅谷喜雄、佐野正吉等がある。

脇方高安流は明治二年十一代高安彦太郎の死去で断絶したが、名古屋の西村弘敬の子滋男が高安流宗家を再興し、現在その子孫に至っている。類造先生は右宗家滋男の父、弘敬の先代敬之の直門で弘敬の先輩である。

(芸系)

川村類造

敬光



杉山義敬—弘敬—滋男

従つて名古屋の舞台はじめ各地で能の場合にワキ方として各流家元のお相手をつとめ、また楽屋などでも上座に招ぜられて大層羽振りがきいたものだ等と当地では言い伝えがある。

ワキ方の保存、隆昌のために生涯を捧げられた長老

類造先生は昭和十七年十一月六日七十七才(数え年)の高令を以つて病死せられ、法名を吟月松韻居士という。朝な夕な月に吟じ、松風の音に和した先生の謡を評した名文句だと思う。墓は新城市内の桃午寺に立派なのがある。

参考

川村家に現在保存されている資料

- 一、明治二十六年九月 和布刈等の免許書
 - 一、明治二十六年九月 船弁慶等の伝授書
 - 一、大正二年二月十日 皆伝免許書
 - 四、当流謡秘書 全 一
 - 五、高安流脇仕舞附 乾 一
 - 六、つくりものの書 一
 - 七、色々付 他見無用 一
 - 八、謡本百番組 一
 - 九、読本下掛 外百番 一
- 註
- 一、文中類造先生以外の方の敬称は繁雑を避けるために省略させていただいた
 - 二、高安流及び西村家系については別に稿を改めて記すこととした。

平成五年十二月二十日 大原生

齋藤長男

いつぞや先生に御目にかゝった際、私の郷里に高安流富沢先生の碑と云うものがあり、私の祖父も高安流の謡を習っていた旨申し上げましたところ、そのことを調べてもらえぬかと云うことを承つて居ります。

一般帰省の節（岩手県水沢市、旧藩では留守家一万五千石）菩提寺長光寺の高安流富沢先生の碑と云うものを写真にとつて来ましたので、同封御送り申し上げます。

住職に聞きましたが古いものがなく、よく判らないと云うことでした。

そこで写真から解読しようとしたのですが、私は漢字の素養が乏しくよくは判りません。然し何度も見ている内に次のようなことではないかと想像いたしました。

以下は誤があるかも知れませんが、私が漢和辞典を引きながらの解釈です。

富沢先生の生前の本名は重満。水沢藩留守家（一万五千石の大名、留守藩とも云つて、伊達藩の支藩）に代々仕へていた。

学問の志高く、東都（江戸）に学びたかったが、藩の士族の子弟としてそれを行なうことは容易ではなかった。（高野長英はこの藩出身）

同僚の士族藩士郷右近（これは私も聞いたことある家）の努力で東都で学問することを得た。

富沢先生は本藩の士嶋岡某と云う人に高安流散楽を習ったが、いくばくもなく嶋岡氏は故有つて江の島流刑（？）左遷されていた。

そこで富沢先生は嶋岡氏に再び習うことになる。（江戸と江の島、それ程遠くない？）辛酸をなめながら努力し、数年で嶋岡氏の領域に達しその蘊奥をきわめた。

その後留守藩に帰るが、藩主邦寧はその学識を高く評価し近習に拔擢した。その献策は信ずるところに従つていささかも憚るところ

がなく、主君邦寧の寵を得て過した。

主君が亡くなるや慰留にもかゝわらず、近習の仕事辞め、専ら謡曲を地方の子弟に伝授し、その門弟は千余人を数えた。

明治二十八年九月二十三日に急に病にたおれ再び起つことはなかった。享年七十四才。無量寿山長光寺の先祖の墓所の整理を行つていたので、富沢先生の先祖の墓は現存していません。

この碑文にある嶋岡某と云う高安流を教えた人のことは判りません。

墓碑は写真にあるように明治三十二年八月十五日とありますから没後四年にして建てられたことになります。

藤井 千鶴子

橋岡久太郎先生は私小学二年生の頃四国高松で肺炎に罹られペニシリンもない時代でしたので岡山医大付属病院に入院（数ヶ月又は暫く）され一命をとりとめられ半年の間岡山城の近くに家をお借りになり（元橋岡家内弟子の故有松栄次先生のお父様のお世話とおもいます）御休養されました昭和十三・四年頃のことでございます。奥様も若先生方（慶応普通科幼稚舎の生徒でした）も東京からお越になつて毎日渡し舟で旭川の対岸の後樂園へお渡りになり能舞台でお稽古をされておりました。

その頃岡山では「一声会」といって（下田先生のお父様のおはじめになった会でしようか？）医専の先生方や錚錚たる方々のお謡のグループが岡山城の近くの小川眼科でお稽古されておりましたが、高橋静夫先生が指導さ

れておりましたのにお止めになったあと久太郎先生がお越しになるようになりお宿を私の里高田が致すようになりました。父について私（小学二年生頃）も参加しました十人ばかりの方が丸く並んで先生は床柱を背におすわりになりはしの方から一行ずつ謡うのですが卒都婆小町の「山は浅きに」が大へんで何度も「や」をなおされ「ま」をなおされて大変でしたが出来なくてなおされる人はまだのぞみがあるわけで私の父は一番下手で全く直らないので先生は父の時は直さないで手でお顔をなでていらしやいました。これは「箸にも棒にもかからない」という意味で全く直すねうちもない、望みがない、という意味らしいのです。私は父のかげにずっとすわっていて恥ずかしくてたまらなかつたのですが、たまには一言だけ謡わせていただいたこともありました。

（実家）里では先生はいつも独酌でゆつくりと召上がり瀬戸内海のお魚のめばるやげた

（舌びらめ）がお好きで鯛や鰯のおさしみ（おつくり）など母は一生けんめいにお料理をつくりました。その頃まだ岡山は今ほど人口がなく新鮮な内海のお魚がいくらでも手に入っておりました。あとから先生が四国高松のお生まれと承りなるほどと思ひました次第です。父は先生を心の底から尊敬しその頃大阪のお稽古から岡山、高松、呉と一日ずつお越下さつており新幹線もない頃ですから深夜岡山駅にお着きのこともしばしばで寒い時はマントを着て父が岡山駅までいつもお迎えに参じておりました。改札を出られる先生が父をみつめてにつこりなさる笑顔が父は心から嬉しかったようでございます。お言葉も少なく静かなお方でお心の深い哲学のようなお話を承り（禅の心にも通じるのでしょうか）感動致しております。私は十五才の時、戦災で里が全焼しましたが先生は終戦後は九月から疎開

先の家（お稽古場）（岡山市）へ毎月お越しくださいました。

あまりにも立派な先生がお越しになりますので岡山の熱心な人はみなお稽古に一度はお越しでしたが、先生は一字々お直しになり沢山は進まれないので辛抱の出来ない人はみな来なくなつてしまい、出来なくてもしがみついている私たち十人ばかりでいつまでも人数がふえずでしたが、先生は全くそれには無頓着でいらつしやるやうでした。四国や九州からもお古い方がお見えになり中には道場破りのように何十年もなさっているお謡のかたが見えて先生にお目にかかり一曲お耳に入れますと、「もう二十年程稽古したらものになるかもしれません」と先生に言われてしつぽを巻いて帰り二度と来られないこともありました。先生は「天狗」が大きらいで皆に「天狗にならないように。」「舞は、わる達者ににならないように。」と度々おっしゃっておいりました。先生は皆に「上達には三つじやまになるものが

ある」と仰せられ「何でございましょうか」とお伺いしますと「声のよいこと、覚えのよいこと、拍子のたしかなこと」この三つがじやまになる。とおっしゃるので皆「では私たちは三つともないから、まだのぞみがある」と申していたものです。今考えてみますと三つとも「天狗」になりやすい要素なのでそのように戒めておられたのではないのでしょうか。先生は「器用」な謡よりも、下手でもこつこつとまじめに長い間努力した謡がよいと、よくおっしゃっておりました。先生のお耳は大きな耳で、その上その耳を謡手の方へ立ててお聞きになるのです。クリ入等十二分に突っ込んで謡いませんと先生のお許しが出ず先に進んでいただけなので、何とかお許しが出るようにと、だんだん小さい声になっていきますと、お耳を立ててお聞きになって「ごまかさないで」「まあ（もう）一度」「まあ一度」とおっしゃるのです。何度くり返しても先へは進めずその内どうしてよいかわからなくな

って涙がぼろぼろとでてきたこともあります。「かな」の発音と「字移り」とを徹底的に直していただいたように思われます。クリ入のみならずかな一字／＼を直されこれはの「こ」、「こ」から「れ」になるところ、「れ」、又「は」になるところが大変というように、何度も／＼繰り返し先生のお許しが出るまで先へ進めないのです、時間はかかるのですが先生は「沢山しなくても、これが出来たら皆出来る」からとおっしゃってまわりの迷惑とか、時間とかは超越しておられたようです。きつと今の私の謡をお聞きになったら「ごまかしてる」「おもねっている」といつてどんなに叱られることかといつも恐ろしくなります。

先生が「おほめになる」ことは、まずありませんでした。おほめになっていたのは、先代の「喜多六平太先生」は天才ですと、「野口兼資先生」の放送があつたらよく聞くようにと、おっしゃっていたくらいで、ついにおほめになったのを聞いたことがあります（先

生のような方におほめをいただくとはめられた人は天に上がりますものね）例えば「今日は十分に舞えた」と私が自分で思ひ人にもほめられていると先生は何ともむずかしいお顔をなさって何をお怒りになつてゐるかわからなくてとてもつらかつたことがあります。その反対に何か失敗しておちこんでいたとき、ひとこと励ましていただいたことがあります。見えすいたお世辞など絶対におっしゃらない方でした。

先生のお心の深さとあたたかさを知るお話です。「芸は、行きづまつて苦しんでいるとき、上達しているのです。これでよいと思つたときから、芸は下がります」ともおっしゃったことがあります。又「何十年とけいこして、ここはこう謡つたらよいと、やつと気がついた時には、声が出なくなつてゐるものです」ともおっしゃつておりました。

発声のことは たとえば

○かなを歯切れよくきうりをかりつとかむように（これは「かきくけこ」の行など特におっしゃつておりました）

○引くと「お」になる音は、引くだけでよい。一字づつ「ウオ」「ウオ」といわない。

○イ列の音は特に注意しワ行の「ゐ」のようになりにするように。特に「し」の音。

字移りは たとえば

○はずんで移る字となびく字とあつて、一字ずつ並ばないように。

お稽古をしていただきました中でも苦心して々忘れられないのは

へあかつきごとの あかのみづ。 鋭い音の集まりを、どう移るか。

へむかしはりさんの はるのそのに。 などです。 苦しいく謡でした。その他沢山。

私は小学三年のとき富士太鼓の子方をし四年生のとき熊野のツレをし五年生のとき菊慈童、六年生のとき乱を直面で披かせていた

きました。その後、巴、終戦後、杜若（から面をつけ）井筒、楊貴妃、熊野、松風、と毎年能をさせていただきましたが、松風のときは一年間けいこをして会になりますのに八ヶ月（月一回のお稽古です）謡ばかりでした。九ヶ月目に心配でたまらず「先生、お形を」とおそろく／＼申し上げましたら「松風は謡が出来なくては舞えないから」と仰せられ又謡「心づくしの松風」との戦いがはじまりました。謡がどんなに大切か、身にしみております。有難いお教えでありました。今、日本のことばのうつくしさ、それを十分に謡うにはかなの発声、字移りの大切さを感じます。

先生のお能を拝見しました中でも京都の「定家」大阪の「姨捨」は私の一生のうちで最も感動し魂を奪われました。最高傑作のお舞台でありました昭和三十年代のように思われますが京都の金剛能楽堂で、十二月底冷えがして時雨れておりました。鬼頭五朗先生や

岡緑蔭先生もお見えになっていたと思います。序之舞の間中、面の目から涙がこぼれているように見え、もう二段、もう三段と進むのが惜しまれました。お運びに見とれ最高の雰囲気のにまれていたのでしょうか。大阪では神々しい月光の精を拝み宇宙の神秘を垣間見せていただきました。これ程のお能があるのだと全くうちのめされる程の感動を覚えました。

長々と書かせていただきました今まで心にはありまして書いたことはなかったのですが、このような機会をお与え下さいまして有難うございました。

岡山では春、秋とお能の鑑賞会を催し、社中の発表会も春、秋としていますので大変忙しくその上今まで二、三十年（主人の）父、母と主人と病人をかかえて続けておりましたので、昔のことを整理するひまもなかったのですが、此度日本能楽会からくわしい調査があり又主人が昨年暮れ旅立ちましたので昔の

ことをいろいろと思い出しております。お役に立ちますれば幸いです。立派なご本をいただくながらお礼も致しませず申しわけなく存じております。おっしゃいます通り私も年ですので書いておいてよかったです。

鬼頭晴義

「道成寺に想う」

平成十三年五月三十日

西区八坂町は商店が多かった。その中に、簞笥（たんす）屋、籠屋等の製造販売の店もあった。職人の技に魅了され、じっと、物づくりを、観察することがあった。

籠屋では、円錐形の鉦（なた）で（中央が尖っていた）太い竹を四分割したり、六分割していた。節を取り、縁（へり）をそぎ、手触りをよくしてから籠に組み立てていく。曲げるときは、火に竹を炙り軟くし、形を整え

て固定する。出来た籠は山積されていた。運搬用の籠である。

当時は、ダンボールもなく、荷物を運ぶのは、籠、樽、木箱等であった。

日曜日に父と外出するときは、いつも布池の能楽堂である。能楽堂で食事をする、テーブルに椅子、皿にスプーンである。家に帰ると、ちゃぶ台に、茶碗と箸、子供ながら、このアンバランスに、奇妙な思いをした。

あるとき、楽屋で大発見した。庭に面した軒先に、大きなものが吊ってあった。布が掛けてあり、少し開けていた。中が見えている。近寄って観ると、竹籠である。竹でこんな大きなものが出来るんだ。思わず「でっけえ！」。道成寺の鐘であった。

国民学校三年の夏（昭和十九年）縁故疎開することになり、平和町六輪の伯父五朗宅に、世話になった。

戦後、名古屋の学校に通学した。学校の近くの本山（本山は昭和十五年頃の新築）に、

柴田初太郎さんの家が新築された。周囲は戦災で焼失、家は疎（まば）らであった。土曜日の帰路、謡本を受け取りに、二、三回伺った。伯父八郎の使いである。

昭和二十五年頃から、松坂屋ホールに特設舞台が出来た。やっと、定期的な催しが行えるようになった。この頃から田鍋惣太郎さんが謡本の取り次ぎをされるようになり、柴田邸に行くこともなくなった。

特設舞台の環境は、よくなかった。屋上に子供の遊び場があり、電気自動車の音が響いてきた。

昭和二十八年六月十三日の卒都婆小町（シテ橋岡久太郎）のテープに、この騒音が録音されている。しかし、芸に引き込まれると、これが聞こえないから不思議である。

この舞台は、橋懸りも短く、又、舞台の構造上、道成寺は、上演出来なかった。戦後の道成寺は、熱田能楽殿が竣工してからである。土曜日に能があるときは、学校帰りに、よく

観に行った。

観世流のときは、伯父五朗から、他流のときは、父から声がかかった。社会人になって、このパターンは続いた。しかし、仕事の関係から、徐々に、足が遠のいていった。

父は、「羽衣」「道成寺」のときは、決まって、誘ってくれた。

道成寺を観るたびに、子供の頃見たものと違うことに気づいた。何故あの凄まじい鐘入りがみられないのか、父に尋ねてみた。「子供の頃つて、戦前のことか」「そうだ。シテ柱から、鐘に向つて、飛び込んだら、鐘が、ズドンと落ちてきた」と云つたら、「お前、えらいもん見たな！。それは金春の型だ。舞込みと云うんだ。戦後は、やつてないな」「どうして」と聴き返えした。「危険なんだ。怪我をされた方もあるんだ」。暫くして、「この本、読んでみる」と云つて、「桜間芸話」（わんや刊、昭和二十三年発行）を出して来た。

道成寺の項目を読んで、なるほど、納得。「舞

込みは、父、伴馬（明治三名入）が始めた。滑車の不具合と、鐘引きとの呼吸が合わず、舞込のとき、肩を打った。小書はない。」と記されている。

「桜間金太郎の披露は、二十一才のとき、舞込みだった。道成寺は、十四、五遍舞っていたが、そのうち、三、四遍、この型で演りました。」とある。

その後、田鍋惣太郎編、ガリ版刷りの「お能の番組」を遡って調べてみた。

昭和十五年九月二十八日、シテ、桜間金太郎とあった。

小生、四才七カ月のことである。

「まちかどの謡」 平成十三年五月三十日

八坂町の家は、商店街にあった。右隣は漬物屋、左隣は菓屋、右前は醸造業、その他、

様々な商店が軒を連ねていた。

家の前の道路は、枇杷島から押切に通じる商業道路で舗装されていた。荷馬車や大八車が主で、オート三輪や軍のサイドカー付オートバイが時々走っていた。これは、お城の近くに練兵場があったせいと思う。

名鉄電車は庄内川の鉄橋から、枇杷島に降り、押切へ。押切から柳橋まで、市電の線路へ乗り入れていた。

近くに児玉プールがあった。兄について、野原を通って行った。途中、「ぼった」を捕りながら。兄は、競泳プール、私は幼児プールである。東芝の裏は、田圃で、「とんぼ」釣りをした。夕方になると、赤蜻蛉が乱れ飛んでいた。

家の入口に、能のポスターが時々、貼られていた。羽衣や道成寺、小面や般若等のデザインである。

家の二階は、伯父八郎の太鼓の稽古場になっていた。柴田初太郎さん、飯田頼恵御夫妻、

加藤良久さん等がみえていた。小学生だった兄も一緒に稽古していた。

「柴はつつあん」「新子さん」と呼んでいた。伯父さんの云うとおりである。両氏から、度々、お菓子を戴いた。

二階から聞えてくるのは「あづまあそびの……」とか「そもそもぶりやくの……」等である。稽古のたびに、聞いていたせいか、子供ながら、ところどころ口ずさむようになっていた。

昭和十七年に、榎国民学校に入学した。世に云う小国民教育を受けた。音楽は「ドレミファソラシド」ではなく「ハニホヘトイロハ」と習った。

就学すると同時に、書道と絵の塾に、兄と一緒に通った。隔週日曜日であった。

学校とは反対方向の枇杷島国民学校の近くにあった。惣兵衛橋を渡ると、枇杷島である。

塾の終る頃は、お腹がすいて、急ぎ足で帰った。道すがら、ラジオの謡が聞こえてくることがあった。クーラのない時代である。初

夏になると、どの家も開けっ放しであった。二軒おきに、ラジオが掛けてあり、家に着くまで、断続的に謡が聴こえた。

どの家もZENITHである。民間放送のない時代であった。

「ただいま。おやつ！謡やつてるよ！！」母親がラジオのスイッチを入れてくれた。何の謡かわからないのに、なんだか、ほっとした。

「蟬丸に想う」平成十三年五月三十日

布池の能楽堂に行くときは、いつも、父と兄と私の三人であった。早く出かけるせいか、開演まで時間を持て余した。

見所は、子供達の遊び場になっていた。兄は同世代の数名と見所を、ぐるぐると、飛び廻っていた。（その中に河村総一郎さんもいた。）私は、小さかったので、仲間に入れず、とり残されることが多かった。

その見所の一角に、茅葺風の巡査の詰所が置かれるようになった。揚げ幕のすぐ横にあり、一人入れる程度のお立ち台である。

サーベルを下げ、大きな肩章をつけた、お巡りさんがいた、中にいるよりも、横に立っていることが多かった。舞台と見所を交互に、じつと視ていた。巡査のいないときもあった。何故か、ほっとした。

どうして警察官が能楽堂に来るんだろう。疑問を抱くようになった。

戦後、伯父五朗の家で、能楽タイムズを読むことがあった。東京、京阪の演能状況がよくわかった。各会毎の番組をみていると、「蟬丸」の文字が比較的多いように思った。

蟬丸は人気曲なのか、父に尋ねてみた。「それは、戦時中、演能禁止になっていた。不敬罪になるということだ。その反動じゃないかな」と応えた。

そう云えば、布池の能楽堂に、巡査が、時々、立っていた。あれは、監視していたのかと云

うと、「そうだ」と云って「戦時中は、こういう曲もあった」と忠霊と皇軍艦隊の謡本を出して来た。

忠霊は、作者、大日本忠霊顕彰会の所望により観世会委員会作とある。昭和十六年十一月一日発行。○新五十五銭。著作権所有者、廿五世観世元正。配給先、日本出版配給株式会社。となっている。

皇軍艦（ミイクサブネ）は、帝国海軍潜水艦乗組佐古小尉の原作を大本営海軍報道部の委嘱により謡曲化し「皇軍艦」と題したとある。「本曲の狙いは、大東亜戦争に対する日本の根本理念を明示して、」とあり、独吟のサシには、「然るにかの米英は。東洋制覇の非望を抱き」とある。

昭和十八年五月十五日発行（五〇、〇〇〇部）。○停金六十銭。出版会承認、アー〇〇六七五號初版。となっている。

著作権所有者及び配給元は同じである。梓外に、ゴム印で、○？定価六十銭、特別

行為税二銭、合計売価六十二銭と押印されている。昭和十六年十一月には、検閲されていないが、この頃には、出版物の検閲が行われていた。能楽界も戦時体制下にあったのである。

中尾和子

平成十三年～平成十五年

伊藤（千六）裕康

津市新東町に自宅入口大きな門、庭木や立派な庭あり屋敷廻りは低い竹垣の塀がしてあり屋敷より東に大きな竹藪がうっそうとして大門地区の子供等それより海岸寄りに学校あり毎日通学するのに淋しかった。観音寺の東角の方面に新東町あり此の全町五十軒余りの借家あり。

新東町の桜井氏が家賃の集金や修理をしていたが代々大工職伊藤家は新地のお殿様と言っていたそうです。千六師の兄準太郎は大正

時代にお庭作りの研究にアメリカへ行き病没されたと千六師より聞いております。毎日屋敷のへび取りや草取りやら専門に居たそうです。千六師内弟子より職分になりすぐ東京都渋谷区代々木へ家・土地を買い他界迄此処に住む。

千六と清子夫妻には子供なく清子さん囲碁の先生 自分の弟子を彼にして別の所で住み別所をした所が彼に妻を迎へ男の子二人出来此の四人を伊藤家の養子養女として東京都品川区東大井に住んでいられる。

伊藤義夫、囲碁の指導

千六夫妻他界後は渋谷は売り東大井へ。千六師最後は糖尿病で盲になり片足切断で一週間で他界。目は長い間まだ津へ来て下さった時は目を直して又津へ来るから一円でもよいから呼んでほしいと言って行かれたのが津は最後でした。昭和三十八年六月でした。父の

喜寿祝の宴会での話です。清子さん心臓悪く他界、菩提寺は津市寺町上宮寺に墓石四十基を津市公園墓地へ二十基にして移転した。千六師他界の時一基と五輪塔墓誌と作り、後は全部お寺へ返されました。年回年には東京から詣りに来られます。中尾の前方にあり私も時々お詣りしています。

震災後不在地主で市に買い上げられ少し自宅の土地を平和公園と名付け大きな木が数本残し市が管理しています。内弟子卒業の頃は喜多流のお殿様と言っていたそうです。

伊藤師は東京と丹後宮津に多くさん弟子があり死亡後は高林師菊生師に弟子入りされたが今は他界や老人でいられないでしやう。

福岡師

福岡師は名古屋弁護士（周斉）母方の妹さんも名古屋に嫁いでいられます。御主人他界本人は不明。千葉県に住み奥さん早く他界

二人の男の子と生活 長男謙一、川崎市多摩区生田で中華店をして次男詩二さん東京都調布市国領町 青年俳優座を出て今は弟子が四人位いて全国へ珍芸をして廻りよく大須演劇場へもこられ昨年津のサンバレーへ来られたので見に行きました。テレビにも出ていられます。変った芸をなさいます芸人です。兄弟気が合わづ私達は謙一さんは年賀状の付合詩二さんはよく気の付く方で先生を良くお世話なさいました。中尾とも何にがあっても東京から来て下さる付合です。お寺は名古屋新栄町宝林寺で平和公園墓地周斉師は京都清水寺管長（前）大西良慶に貫周と戒名をつけてもらい毎年正月一日には金盃でおとそを頂かれ其の後四枚書をかかれて一枚頂戴して帰られる一年の内此の四枚のみで絶封に外の日は書かれなかったそうです。

津の或る寺が色紙を持参三拾萬持って行つたが書いてもらえなかったと言ふ話もあります。中尾も福岡師の頂戴されたのを三本と色

紙と大切に保存しています。

福岡師の稽古場

東京芸大服部時計（全県の）宮城県登米郡高地鳥取津和歌山大阪、各地の世話役が熱心で又此の先生不思議と国宝の寺院に御縁があり、東北からは瑞巖寺（仙台）の本堂佛前国宝で佛にお尻を向けて舞囃子を舞わせて頂いた事は忘れられません。其の頃は拝観料出さない時で静かにお参りもあり見て下さっていました。佛前が四間四面板間で両側畳でした。大きい間口のお寺でした。裏側は色々の佛が並んでいて立派なお庭でした。控間も多くさん使用させて頂けて一日楽しかったのが一番。次に鎌倉の建長寺国宝の間で二回、清水寺（管長様のお住いの成就院）これも国宝の間で三回どのお寺も国宝ですから大鼓のほうじは炭は一切使用禁止、電熱でした。タバコも一切だめです。此のお寺の庭も立派なものでした。

此の入口に何百年前の地蔵さんが百五十体位建ててありますがそこへ管長さんのお志で可愛い石佛と其の下にお骨が入れられています。時々お参りに行きますが一体だけ眞新しくて管長さまの奥様がお花を上て下さり、福岡師本当に日本一の人ですね、追善会も百五才の時にお経を勤めて頂き後、大会となりました。建長寺も一周忌追善会で管長さんのお勤めでした。大阪の四天王寺本堂で大会、其の外は鳥取公会堂三回、四国公会堂二回と四国のホテル、伊豆のあさば旅館二回、宮城の登米郡、登米町公民館三回、何処の会も北から南からと百人以上は出演する大会で福岡師は御礼は一切取られず此の大勢の人々に喜び感謝感謝で皆会員の負担は交通費と宿泊費と会場費のみですから皆々顔合はせるのがとても楽しみで大勢寄るのです。これも先生の御人格です。

福岡師の生活

男やもめでの生活でしたから一年中（一月と二月は湯）水風呂、冬半じばんに一重の結城つむぎ着物、夏は麻の（絹麻）着物、中尾にこられるとすぐ水風呂後で着物を水洗いして私が干しアイロンを掛け帰りに持って行かれる、いつも二枚位は持参、一年中一重、夏はたまにゆかたを着られる事もありました。健康保険一度も使はずで市川市長より表彰されました。宮城県登米郡の名誉町民になりました。最後は鳥取迄行かれたら腹痛が起りました。即手術、腸ガン。弟子の若川栄一教授夫妻のお世話で懸命でした。私も何度も行きました。全国の弟子に呼掛、入院費、家政婦代等の心ざしを頂戴して無事六ヶ月で退院せられ宮城県が全快祝大会を計画されこれ又全員の出演で盛会でした。

入院の時の保健高額医療費を次男さんが手続き請求されたり六十万位返戻金が入りそれで紋付羽織袴と一揃い作られ伊豆のあさば旅

館で大会の時始めて着られて御挨拶されて晴姿を見せて頂きました。此の時は川崎市多摩区生田に住んでいました。市川市で表彰頂戴し川崎市多摩区で多額の医療費を頂戴し、ひや汗ものですと言っていられました。其の後よくなられたのですが三年後に肝こうへんで入院二週間位で他界となりました。本当に百人以上の大会ばかりで思い出の深い先生でした。私も多くさんの先生にお稽古して頂きましたが、後藤先生と福岡先生も明治時代の代表者といつも感謝しています。

私への手紙の表書は、和子皇后、和子妃殿下、又は子宮内の宮妃殿下とかで配達人も驚き乍らポストへ入れたと思います。顔を見るとバアーさんバアーさんと言はれ菊生師がそれを聞いて奥さんに言われたらしくある年鳥羽の大会の後、和田金で昼食、菊生師と宝生閑さんと私三人が写真をとられたのを奥さんに見せたら何んなの中尾のバアーさんとして若い人ね、本当に年取った人と思っていた

わよ、可哀そうにと云つて下さった由。

福岡師追加の分

福岡詩二さんに電話していましたが留守でやつと今朝（十二日）話を聞きまして間違といけなからファックスで送ってもらいました。

左の通りです。

○祖父 名古屋市中区下前津在住

福岡寛 俳号 五瓢

弁護士と俳句 平和公園の墓石にも俳句が書いてあります

○父 福岡周斉（貫周と良慶管長に付けて頂き手拭等はいつも貫周福岡周斉と書いてあった）

寺は新栄町の宝林寺 墓地は平和公園

改名 純眞院義道（ギドウ）貫周（シュ）居士

良慶管長が付けられたそうです。福岡寛の一

人息子兄弟なし。

長い間の電話連絡の結果これだけわかりました。私も色々考へたり電話で方々聞いたりしてやつと此の程度メモ式です。笑はないで、もう字もわかりません。長い長い論文でこれで卒業出来ますか。私も二年前より足の運動とぼけ防止にとお茶の稽古に行っています。近頃岩本さん、神戸の妻千栄子、藤田さん、宝生流の別所さん等四、五人で小さなお茶会をやったりして謠とお茶で色々美術館でお茶道具や名人の書画の本買って来て下さりとても楽しみが変り、もう少し年寄になりたくない気持で頑張っています。

菊生師の思い出

毎年春は津大阪広島山口と寄つての大会ですが大槻舞台では菊生師が心の急がしい方ですから次々と走り廻っていて良い気分ではありません。皆々ぶつぶついつて居ても不断が

厳しい稽古ですから皆上手に舞いますが先生は当日は高額会費を払っているから好きな様に舞いなさいと言って切戸口では御苦労さん御苦労さんと言っていられました。

毎年夏は浴衣会費一万円これは菊生師の一年の小使いと後は宿二泊と交通費、近い所は鳥羽と榎原温泉、外は皆遠方ばかりでした。私は五十三年夏迄後、平成十年の湯谷温泉で終りとなりましたが、今井欣三郎（能評論家）を他界前迄連れて来てウイスキーを一本持たせ座敷の角（会場）チビリチビリと飲んで二日間見たり寝むったりしていられました。これは菊生師の能評を良く書く為のサービスと言っていました。私の松風がお気に入り、あれは菊生の弟子やない良かったと菊生師あの人の後藤師の古い弟子やったと言っていました。見てる時もあるのかと一番気になりました。それも六年位後は宝生閑観世栄夫宝生閑は自分が能を舞ふ時絶対断わられない様不斷が大事やと後はゴルフのグループで二

日間ゴルフに会員が案内して夕方帰ってから一番大鼓や笛や小鼓等に出て終り大宴会となる。

平成八年頃より明生師が弟子を少し連れて来て菊生師大變遠慮してられる姿です。時々ストレスがたまり爆発しています。菊生師御自慢の番組も全部字体から変りました。今まで楽しんでしていたが淋しいと言っています。番組はいつも送って来られ夏の喜多の歓進謠会も自分のはテープに取り送られてきます。大阪能は何時も十枚位は買います。この程度のお付合で御機嫌です。お稽古場は東京大阪広島山口津はまだ消えません。インターネットに出ています。

東海六治郎師（古竹）

津市萬町でお茶屋 表具師でもあった。

後藤師や高林師には習っていられません。きつと津の下里常吉や荒木一作さんでしやう。

お店が萬町にあり其の二階で教へていられ岡俊次さん外四名位の弟子で古竹会をしたいが喜樂会も出て頂きたいと一年に一回位合同の古竹会でした。その時前田さん茶碗屋を大門商店街が一人でやっていられたから古竹会にも顔は見た事なかったです。古竹師は少し変つていて古竹会と言つてもいつも正面右角に座り觀賞して余り話さない人で前田さん達はとてもこわい父で何にも話した事ないとよく言つてました。妹さんが京都へ嫁し戦後高林さんに三男の忠夫さんはお父さんに習つていた中日能に地謡にいつも出ていられたがこれは修一さんの身替りと思つて許していた様です。次男康二さん宝酒造停年になり津市西天王寺門前を借り古竹師以来住んでいられた。この人は子供はなく修一さんの奥さんと結婚しその子を養子にしていられた。三年前、鳥居町へ転居されて新築の二階から転げ落ち死亡、今は奥さんのみで息子さんは外に出ていられる。修一さんが男の子を一人残して行か

れたから東海師家は続いています。忠夫さんは近鉄勤務停年退職。四日市で奥さん死亡。鈴鹿へ転居、後妻さんと絵を楽しんでいられます。

東海師の件

私は戦前の事は知らないが昭和二十二年頃に津邦楽協会が出来、琴、芸者の舞踊、能楽で岩田橋手前のN.T.Tの後ろに養生小学校の講堂のみ焼残り此の会場で能楽は舞囃子 仕舞、古竹会喜樂会で其の時に川口さん芸者の舞踊の二丁鼓を打たれました。私は初めてでした。古竹会は岡俊二さんの舞、囃子、喜樂会も八人位出ましたが、前日の申し合せには東海師中尾宅へ来られたが当日は出られず只見て居られるのみ、これも五年位で終つてしまいました。喜樂会も此の講堂で龜山より舞台を借り七十才の祝会をしました中尾 能、湯谷 岡村、猩々 和谷、頼政 此の時和谷

さんの奥さんが手伝っていられたか頼政頭巾が仲々手間取り見所の人はたいくつで大さわざとなりました。鳥羽より野島忠次さんも手伝っていられたです。此の人は和谷さんの時は何時も手伝っている人です。鳥羽の衣装付や管理をしてもらいました。此の人が居るのに賀多神社の小鼓が持出され岡田みね（和谷社中）等が稽古に使って居たと聞いています。此の会にも東海さんは自分一人仕舞に出て下さり和谷岡村両師の社中さん全部出て頂き記念扇百本作ってお渡ししました。盛会な会にして頂き喜樂齊大變喜びました。

東海師の古竹会は一年一度は有りましたが喜樂会が手伝って催されたが、先生は一番仕舞を舞われ後はいつも見所の前の右角に座って居られた姿は、口髭をはやされ喜多六平太のまねをしていられる厳しい先生と思えました。家は万町でお茶屋が奥さん先生骨董品商をし乍ら謡の教授で家でも厳しかったそうです。

東京より後藤師福岡師京都より高林師の三人の稽古場へは入門せず津市在住の荒木一作さんにつかれた（此の人不明）やうで、高山神社は東海師が（栄一は不在中）守られていたので修一さんを内弟子に出された奥さんは泣いて反対されたそうですが、余り厳しいので子供は皆やらす忠生さんが少しやられ（家では少しも教へなかったと、女はやるものではないとの一言でしたそうで、修一さんに命をかけていられた様です）、前田さん（妹さん京都にて高林息子）についていられました。今はやめられています。余り厳しすぎて世間（能楽）の人にも余り心安く付合い出来なく雲の上の人の様でした。

前田光子さんの事

戦後大門商店街で陶器屋をし主人は税務署勤務でしたが、税ム所のお金銭関係でやむなく解雇となり商店街の経理を一人でやって居ら

れました。

東海師の追善会を喜樂斎がして上げたいと言ふ。其の頃前田さんは大門を売って桜橋、今の処へ移住された時、追善会に仕舞、羽衣を舞われる事になり喜樂斎前田さん弁当持参で稽古一週間位朝九時く夕五時迄、特訓一ヶ月で無事舞台に上られる様になった栄一を見ていると言葉では云いあられせん東海師の御礼の氣持でしやう。後は古竹会を継ぐ事に頑張つて下さいと何時も言っていました。

私は前田さんの一年前に後藤師と福岡師の取立てで免状料十五万円送つて下さいと言われ、十五万十御礼五万二十万送金し後藤師の御礼のみ後日福岡師のお稽古に來られた時に五万渡す予定が突然福岡師から御祝一万円位の物が高島屋から届き尋ねたら後藤師より半分頂戴したからと言われ、又後で兩人に五万御礼を送りました。本当に心やさしい両師には感謝しています

岡村師

長男病死、次男暢郎 三男戦死、長女田丸の森下ひろ、岡村家は暢郎さんが名古屋で商売していたが今は詩吟を教へていられます。此の人が岡村家を継いでいられます。田丸出身で大きな家で向側に二号さん置いていたが戦災で伊勢の方へ転居、田丸の入口川添に建っていた大地主と聞いています。戦後は岡村夫妻は伊勢の八日市場町岡三證券出張所の裏に住んでいられ伊勢の角仙へ勤務後は田丸の娘の婚家先森下さんと二人共お世話になり終了です。二号さんは松阪へ住わせ娘一人（春子さん）と暮していました。岡村師の本妻の後に二号さんも他界、娘は何処かへ結婚不明、息子戦死で遺族年金で生活、息子のお蔭といつも言っていたりました。

岡村先生の事池山さんに電話で聞いた事を書きます。

岡村恒夫（保道） 田丸新地（田丸川の附近）に大きな門がまへの邸宅が有り一人息子で親は医者らしい。奥さんは久居から来ている。子供は「長男大阪へ早く病死」次男陽郎名古屋市中川区にて商売、今は詩吟の先生。大正五年生れ、私の主人と松商同期よく存じています。三男戦死。長女ひろ 田丸の森下家へ嫁す、岡村家の近く川のそばへ。

岡村家は元紀州藩で和歌山より田丸へこられたと聞いています。おぼっちゃまで余り仕事はせず少し南勢銀行へ行き退職。田丸のあさや芸者置屋で二号を作り本宅の前へ住み毎日通っていられ、後は松阪へうつり春子さん一女が生れ何処かへ嫁入している。二号さんは三十五年頃死亡。淋しいと私に言っていたれました。其の後四十五年頃本妻さん死亡。

若い頃、田丸は売払い戦後は伊勢市八日市場町の岡三證券の裏に住んでいました。私も御邪魔した事有ります。その頃より伊勢市の角仙商店へ番頭さんに行っていたりました。

た。其の後老体になり夫婦で娘の森下家に六帖一間のプレハブを建てお世話になっていました。田丸では池山さんのお父さんが弟子等の世話やら親類以上に保道さんにつくされた由です。岡村さんは若い頃より謠いがすきで後藤師が職分になりたてに津や伊勢へ来られ稽古をせられ中尾市川さんと岡さん（現の桜水楼）で一生懸命の稽古と聞いています。

父は福岡師後藤師高林吟二師と三人のお稽古を受けていました。岡村さんは自分一代で終りました。池山家はお父さんが私の裏の大門通りに丁字屋洋服店大きな店に勤めていられたので田丸を少し残して売り、其の金を買主に送った日に戦災で焼け（西堀端町）其の上七月十四日に幸さんの妹や四人爆死された、其の時私宅も池山さんの近くで母方弟、両親と四人爆死其の近くに私娘時代に下宿していましたが、其の日は自宅へ帰へった日でもどりましたら玄関に大きな爆弾が落ち、私の荷物皆ふき飛びお蔭で一日の事で命だけ助か

りました。

中尾平兵衛

狂言師 芸名 藤井六三郎

一日目 六三郎は 高山師 神奉能の時明治

三十三年十月四日

四日 萩大名 藤井六三郎 伊勢門水 井上

菊次郎

不見不聞 井上菊次郎 藤井六三郎 伊勢門

水

二日目五日

空腕 藤井六三郎 井上菊次郎

蝸牛 伊勢門水 藤井六三郎 井上菊次郎

明治三十五年二月五日没ス 六十三才

これが最後の名古屋の方々の狂言は終ります。此の先は不明です。三十三年以前は井上師らと何処かで又は高山神社で東京から宗家の来津には此の方々と出演したのでしょうか。伊勢地方の人は余り出演している番組は

出てきません。多分名古屋高山神社のプロの会は井上師門水と御一緒に出演していたのでしやう。

喜樂斎

明治十九年九月二日生（平兵衛の四男）

職歴は履歴書の通り励精館中学は現在の県商業高校です。

芸歴は左の通り

明治四十二年四月十世喜多六平太に入門

大正四年十月に教授を許さる

喜多会三重県支部会員明治四一年五月二十日

入会第五十六号

教授の取立は師範教授取締の金子亀五郎師が宇治山田町へ来て謠一番謠わせ舞一番舞わせた結果六平太が許可されたと私は聞いていました。其の時は宇治山田百五銀行で宮後町に住んでいましたから野口屋営業の時、喜多六平太が毎月一週間位泊込み、其の時に稽古していたとも言っていました。六平太は夜に

なると外へ出、目くらの後につき弱法師の稽古の参考にしていたそうです。初めの稽古は津の方で下里、荒木、岡新六等に習っていたのか東海師には習っていません。此の三名にも習った事は聞いていません。早くから高林吟二師福岡師後藤師にはお稽古していた由です。高林師の稽古メモ帳の通り戦前迄は色々な伝書が書いてあります。後藤師の型も入っています。舞は高林師の方が多いやうです。

中尾和子

大正十四年九月二日生れ 安芸郡美里村桂畑

山下謙治郎長女

昭和二十年十二月三十一日 中尾喜雄と結婚

昭和二十一年三月 喜多六平太入門

昭和三十二年五月 謠教士

昭和三十九年十二月 舞教士

昭和五十三年 教授トナル（後藤・福岡師取立）

入門後は喜樂齊に稽古（舞）、謠は福岡師に

昭和二十九年頃より後藤師に舞を稽古始め後藤師八十才迄津に、後は栗谷菊生師に引続き平成十年迄稽古、これでプロの稽古は終り喜樂会を細々乍ら続けている、舞は私運良く人間国宝二人に師事仕合せ者でした。良い色々な思い出が残りました。まだまだ寛先生初め諸先生との御指導を受け頑張ります。

又色々なコピー送ります。御参考迄に柳島はお持ちでしやうが送ります。赤目滝は良く読めません。ゆつくりとかな使いを読みまして勉強します。以前に芸能史研究 NO.126 横山柚人年譜を送って下さっても何にも気にしなくて今頃家の中を整理し、先生に何にかお見せするものと見ていたら出て来てびっくり。又、東海古竹会三十周年や喜樂会結城神社六〇〇年祭の番組幸流の幸潮発刊号昭和十二年十月にのっていました。これは田中充さん東大三年生の時に編集長になられ、これで津地方の番組を言っていられて送ったのでしやう。四号で終わっています。二号は鼓の組

立ひもの通し方舞台へ出る時の作法等写真入り書いてあり、とても参考になります。神戸にもコピーさしました余り幸清と変りませんので。

他の芸歴

昭和二十五年二月 幸流小鼓入門 幸祥光

昭和三十三年六月 幸清流入門 幸円次郎

小習 一調 翁一式 能迄

幸流は昭和二十五年、川北とよさんに習い他界の為、二十八年より福井啓次郎幸清流に変わる自宅稽古三十年より今日に至る。約五十年いつ迄続くか少し心配です。今尚六人の稽古人。

昭和三十九年十一月 観世流太鼓入門 鬼頭

八郎師取立

昭和四十四年一月一日 石井流 大鼓入門谷

口喜代三（河村総一郎取立）

謠の方は

大習 道成寺石橋望月迄福岡周斉取立 舞物

小習 舞、囃子十曲、能十曲位迄（後藤師取立）教士は父の取立てです。謠は習い迄は父です。舞も習い迄父です。謠曲と小鼓は充分お稽古しましたが外は謠う時にわかる程度でまだ初心ですからこれで終ります。

おはづかしいが戸籍迄送ります。私が調べ歩いたので此の苦勞を買って下さい。御参考迄にして下さい。先生に電話してから過去帳和子石碑より字書き慶長十三年へ津へ来てからの石碑はなく明和年代から（二七六四）から始まり今日迄明和迄の一六八年間のは今新しく昭和八年に栄一が建替へています其の処に古いのが建つていたかと思ひます。一基に古いのは何人もの人が書いてあるから立替へたのでしやう。平兵衛の父らしき人明治一六年に其の前に母が年号は不明書取れませんでした。他界です。明和からの改名は書取れ年号もわかるが何月と名前は消えています

した。家の過去帳買つて私が書き残しております。後の人の為に。

藤堂家の事

倉田金十郎氏は津御殿場の海岸附近の沼地の田畑を、川喜田家は千歳山を一山田畑屋（田中次郎左エ門）津公園の向側の山を借金返済に倉田金十郎の代に沼を埋め借屋を多くさん建てられました。川喜田家は戦前迄、岩田川のそば新魚町に住んでいられた久太夫四郎兵衛の蔵が焼残っていました。千歳山へ久太夫一族と雲井家川喜田四郎兵衛と大きな山一ぱいに建って居ます。浜作料理店も半泥子と呼ば寄せ、半泥子の好みに建て料理店半泥子のお蔭です。

田畑屋は山の平な所に赤瓦の借屋を多くさん建てそれは戦災にまぬかれ残っています。二十三号線ぞいのお堀の附近は戦後すぐに管理人が一坪百円で売り払い一時は一坪百八十

万になり商売やめて売払い静かな処へ立派な家を建てて暮していただける方もいます。

藤堂さんも東京でこの金で暮していました。毎年の奉納に謠や舞をしています。喜楽会で続いています。戦後三年位は御夫妻で御覧になられました。東京から来て。今は藤堂家と書いて酒二本神前に供へてあります。

明治大正時代は能を舞ふ時は藤堂家より三百円頂き桜水樓で二泊して楽しんだそうで不足分幹事等のみ一円づつ出し合つたと父が言っていました。今は食事なしで茶菓子持参で二年前より一万円神社から頂き二千円初穂料供へ後は喜楽会へ頂けるやうになりました。田中家は私の近くのフェニックス通りの佛だん屋岡林の隣り、今は道路に蔵のみ残りそこにはお茶道具、仕舞、袴、鼓等あり道具屋が蔵に入りそれぞれに鼓仕舞袴等は私方に買いました。田中充さんは知らないでしょう。

倉田金三郎（金十郎）

津市八幡町の大家高虎が倉田家に借金を返済の代りに御殿場海岸附近の田地を代り返したので大地主、金十郎さんは八幡町の酒屋辻金より養子に入った人。

立派な家で表右角に天皇さんの碑が建っています。金十郎夫妻は他界子供なく学校の先生夫婦を養子にし、その方が住んでいられます。倉田金十郎の分家が八幡町倉田正邦さんが居られます。此の方は三重県郷土資料刊行会で発行していられます。研究者此の人と心安くなり時々本が出来ますと持って来て下さるとても勉強になります。

橋本誠太郎の家

津市上浜町大地主大山持の大家で醤油製造、お父さんは滋賀県近江の醸造屋から養子に入り、とてもやさしい方でした。学者であり市会議員等長く勤め乍ら大勢の蔵男を使い醤油

蔵を守り、蔵にはお茶道具（利休のなつめも）茶席が三軒あり一軒二階建は広永の半泥子に寄附され小さい家に付けて建ててあります。二軒は今度息子さんが五階建てのマンションを建て替へ、醤油は外で作らせ商号はつぎ、今は学校会社の食品類を納め、大変立派にして居られます。土地は江戸橋附近が橋本の土地、山林は方々県総合文化センターも山を県に買いとられ高く売れたそうです。書物は市の図書館に橋本文庫としてあります。

お母さんはとてもしつかりした方で栄一が稽古に行く様になり二階の部屋（十帖）に敷舞台を作り、いつもお茶の用意をして待っていて下さいました。毎週立派な掛軸で何時も楽しませて頂きました。これはお父さんがして楽しんで居られた。此の敷舞台の板を神戸が買いたいと申し出たが息子さんはわからないからダンプの中へ入ったのでしよう。お父さん東海師に稽古に行かれた処、小さい玄関で前の人が済む迄待たされ聞かしてももらへ

ないでと大旦那ですから余りにも失礼と二、三回でやめたと言つていられました。

長男誠太郎さんも慶応出身で家へ帰り商売熱心で二人共謡いで息子の謡曲には親も安心されていました。わんまんな方で東京でお茶の先生の娘と恋愛でしたが、両親が余りに格が違うと大反対で両親は死ぬ迄口もきかない毎日で大家なのに女中一人置かず奥さん子供を背負つて掃除して居られる姿を見ると氣の毒に思われました。よく辛抱なさつた事です。今でも年賀状は色々と書いて頂戴しています。もう八十五才位です。

田中充家は地頭領町（大門町からヘニクスを通りぬけ南へ行つた中間位に今は福井屋呉服店になっています。津には住んでいられません。東京方面と思います。川喜田家と同じ。伊勢木綿問屋の大家です）

市川博（東畝）

御菌の郵便局長、村の宮司。岡三證券に全部入れ込み、書、小鼓、画、謡と本当に楽しく過ごされた。市川さん傘寿の祝がしてほしいと私に言われましたので、喜楽会の幹事さんに相談したら許可が出、私一人で方々にお願ひして番組会場囃子方地謡の先生方、市川さんは自分で風呂敷を用意して記念品として無事盛会に終わりました。市川さん大変喜ばれ大正十一年に作られた金扇の舞扇を頂戴し、いつ迄も箱に贈呈市川博と箱書きがして下さつてあるのが大切に使はして頂いています。市川さんの長女が前田光子さん教室での稽古をしていられリージョンの大会で会い、いろいろ話しても何にも知らない、懐かしい話を聞かせて下さいと、此の方々は後妻さんが入られてから家を出ているのでそんなに中尾に御世話になっているとはもともと聞かせて下さいと又お合ひして話します。

後藤房吉 幸流小鼓

房吉氏は蟹江の出身で三十三連隊附で津市西新町と思ふ憲兵隊の隊長をしていられた由、大佐かでしたしやうか思ひの外やさしい人で勤務先を聞いて驚きました。終戦後喜樂会には市川さんと御一緒に出演して頂きました。子息さん等は同居でなく老妻と一緒に愛知県の吉良に立派な老人ホームが出来、ホームより方々へ遊びに来てもらいました。鼓は何処で稽古されたかとても上手でした。御夫妻共何時他界されたか不明です。憲兵隊の前はよく私通りました。門兵が二人立っていました。

長谷川氏は鈴鹿市白子町何にかの会社で重役をしていられた由（丹羽善一氏と内外製網会社と思います）二人共喜樂会。

辻 選之助 津市魚町（中尾の隣の町）魚間

屋の旧家百五勤務彦作と言ふ屋号 父親から子供まで皆一家で

〃 三重子

川喜田昌子

加藤寿恵男

妻千鶴

清水壱良

鈴木野婦

喜樂会へ

中尾の隣（南）より魚町で賑やか（せり市）五才より稽古に通い二十五才位迄大阪へ結婚で

川喜田半泥子の姪で戦後は三重医大へ勤務 喜樂会員（川喜田四郎兵衛の長女）

大門（先生宅へ伺った千鶴さんの主人）N T T勤務でした（今息子さんがN T T名古屋支店長）福岡師喜樂会にけいこ

四十年頃より喜樂会和子が稽古する菊生会々員

四日市市泊紀之国屋本家醸造会社福岡師喜樂会 三重県味噌醬油組合勤務

名古屋市正木町に住み福岡師に付き後、名古屋で長田師の世話をしていた 松阪に転居して福岡師喜樂会で遊んでいられた

妹は大阪で和田京子菊生師の世話役広島にも

松阪喜謠会

倉橋美代子（妹）菊生師の世話役一番鈴木さんが気の毒最後名古屋で老人ホームで故人に

松阪和楽会

一島重信

松阪市新町で時計商でやさしい方でした 会にはとても熱心和楽会並喜謠会

小西漁港

（与治兵衛）は松阪市魚町魚屋商大きな店 体も大きくて色の黒い人で中尾も戦後大刀をよく借りに行ったが最後まで何本も作った

愛川義子（松霞）夫婦が熱心でした 御主人

（東平）は医者 町名松阪市本町、義子さんは仕舞はとても熱心

長野清三郎

思い出せない 松阪市垣鼻町和楽会

西井久兵衛

松阪新町代々酒造業 息良一

（和楽会）（主人と同窓）（松商

会長）久兵衛（喜謠会）とても

面白い人で七七才の喜寿には立派な会を催した諸先生方で

伊勢和楽会

松村治郎兵衛

伊勢市船江町醤油合名会社最後は息子さん営業で別宅を

（河崎町、裏の町内）建て大

阪の和島師へ十五年通い後福

岡師、喜楽会は何時に出て頂

き、伊勢では後藤師けいこ能

も何番も舞まれた此の人は和

楽会の人でない

長男

浜口幸生

伊勢市神社で内科医（次男）

松阪の浜口幸成さんの兄

次男

浜口広成

幸生宮後町で歯科医（長男）

三男

浜口幸成

松阪市殿町建築設計士（弟）

三男二井師に鼓も習いいつも独調を、又画も上手で松

阪の文化会館の舞台の松を

一夜でかかれた

牧戸貫一

津市桜町出身 三重県高等農林

教授（現三重大農学部）戦後松

阪城の隣に立派な家を建て（殿

町）座敷舞台も作り、和谷師に
付き熱心でした

橋本藤五郎

伊勢市宮後町（宮川堤の近く）

大きな醬油店製造和楽会の一

番 古い幹事さんと和楽会に会費集

金し和谷師に御礼が一万円の処

二千円不足し八千円納めたら大

変怒られたと私宅へ来て話して

いられた 又集金して納めたそ

うで私の方の会は会費が安くて

嬉しいと良く言っていたらしい

た 其の頃より父は夕食を頂く

みので御礼なんて思ってもいま

せんでした、最後まで

賀川きよ

松阪市本町で美容院経営和楽会

川端正七

うた

笠原士郎

で活躍していられた

久居市本町油正酒製造地酒の初

日で有名 喜楽会員

久居市正七さんの妻 故人にな

る迄熱心でした

松阪市深長町山林等の大地主、

高林吟二に初めは喜楽会途中で

替られ猿田彦神社で白式の翁を

舞われたが舞囃子に衣装を付け

て例外の翁でした。私も拝見に

行きました。見所は一人でした。

笛は長男の藤樹、大鼓長女 小

鼓次女、地謡いは吟二師一人で

した。吟二師突然でしたの驚い

ていられましたが私には能衣装

の件で色々ありました後でした

ので非公開でしたが心よく受入

れて下さり拝見して帰りました

た。これで最後で笠原さんとは

長く付合っていました。元々笠

原氏も喜樂会々員でしたから。
川畑氏は鈴鹿市白子町職業は不明。

吉村久仁枝

伊勢市中島町で助産婦で足が少し不自由で一色能の時、婦人が袴を付け小鼓を打っていられたのが印象に残っています

横田武男

木材商白子市場（古竹会）白子の世話役（古竹会）後は喜樂会

田中林助

津市西之口出屋敷で肥料問屋で代々の林助氏は百五銀行重役で関林と言ふ屋号です。台風の時乙部に住んで水害に合い、私宅で全部整理して毎日表示で日に干して上げました。

竹内豊三

松阪新町製茶販売業老松園と言ふ屋号お茶名も老松園です（保道会）

村田卓三

松阪駅前の大家（喜樂会）私も家へは伺ったが何にをしていら

植山圭一郎

れるのかわかりません。今でも年賀状は頂きます。

安田 有

津市入江町。昔は大観亭料理旅館と大きかった、今は商売もやめ、主人一人津駅前、駅西にうなぎや（大観亭）は昔の関係者が名を残している。

山岸 栄

古竹会 薬剤師丸之内二十三号線沿い昭和二十三年頃藤堂家より一坪百円で買い薬局をしていたのが昭和五十年頃一坪百七十万円で売り岩田町の阿漕駅近くに買替へ立派な家を建て奥さんはお茶書道と教へている有さんは故人、奥さんは私が鼓を教へていた。

福吉 愛

（和樂会）女子薬剤師で大変きばっていられた。山寄とくさんと何時も出演していられた。松阪市本町（和樂会）とても熱

丹羽善一

太田新蔵

磯田 登

池山 幸

心な方で嫁の恵子さんは笛の藤本さんの弟子、笛方、眼科医、家で開業、主人は尾鷲で病院勤務何時も藤本さん笛の稽古の後にはマアジャン最終で電車で帰る由。

白子町、津市の内外製網の重役で長女と共に喜樂会へ白子喜多会で熱心な人。

津市藤方（古竹会）岡三證券勤務で店頭で客に応対の仕事でした。

松阪市魚町歯科医（保道会）戦後に読本一組桐箱入を古本屋へ売られたのを私方に本屋が持つて来て千円で買いましたら磯田さんのでした。今も大切にしています。余り御本人は使っていません。

玉城町玉丸津市高女に叔母の北

河村文子

出ふさ宅に下宿し其の時ふささんが謠熱心でその時からお謠いに入り、三重医大や大阪医大等で勉強し産婦人科医院を開業され独身で過され平成十年でやめられた。三年前足腰の手術をし、今は階段を上れず杖をたよりに出かけられています。毎週家で田丸の保道会員で腰掛けで謠の稽古していられます。

主人清祐 伊勢市宮町に住み、糍屋商店を兄弟で清祐主人が（弟）此の人は狂言岩本師に文子さんは多芸で先生も多く初めは岡村保道 岩本師 後藤師これを突然断つて長田師これは大変後藤師不機嫌、保道会の人八人位連れて長田師へところが長田師の若く元気な稽古には三ヶ月と持たず皆やめて河村さんも

長谷川光子

狂言に帰へり和谷さんや大蔵師の会に一生懸命です。御主人は体の弱い人で早く故人になりました。

松阪市西町（川井町か）立派な本宅あり戦後は女中さんがついて会場迄来てお世話をしていられた。昭和三十年頃より東京に木綿問屋があり、そこへ転居された、以前二井師に鼓を教へてもらっていられた。或会の時、松阪の中北と言う新聞記者（和楽会員）とても古い鼓を何にも知らずに一寸貸してと一、二つ、ポンポンと打ったら皮が破れ奥様何も言はずしゅんとして居られ見るも哀れ、中北さんは何にも知らないから田鍋で買って返すと平気でした。其の後どうなったや

宝生流

葛原正枝

ら。東京へ行かれてからは謠はやめ、鼓と太鼓をそれぞれ宗家に習っている由でした。何年か前に故人になられた由。中西義太郎（喜謠会）本家事務員松阪を守っていられた、松阪の御三家の一軒です。御三家 小津（木綿、紙の間屋） 三井 長谷川 皆東京で松阪木綿の間屋。

津市古河から新町のルナマンションに転居、初めは長唄を大阪まで稽古に行き中程より倉本雅師につき途中長唄はやめ、お弟子を全部謠曲に替へられた津で宝生の世話をして教へていられた。御主人が永井病院の会計で八十才迄御主人が亡くなられたら急に落込み稽古もやめ病院でお合いしてもお話もせず只呆然

として別人の様でした。亡くなられた時は弟子四、五人でお世話して送られたそうで東京へお兄さんがお骨を持って行かれ御主人と別々になられ葛原家でなく実家の方へこれも何んとも言へませんネ、お弟子永井喜美（永井病院長の母）藤田いく（田舎から出てこられた山林王）別所和子（別所結納店）吉村純功（学校の教師油絵の画家現在津能連会長）

野島忠次

竜田正三郎

（素人）に師事。永井病院事務長レントゲン技師、葛原さんに長唄のけいこも今も倉本師に続けられている。宝生も此の人達でやっていられ会員もすくない。

古竹会

赤塚一郎

人物亀二郎師の大切な弟子鳥羽賀田神社の事には熱心にお世話を能も何番も舞われた。鳥羽に居られた頃は熱心でしたが伊勢へ出られてからは余り和楽会には顔を出されません。伊勢市一色町で小鼓を専門で喜楽会には何時も来て頂いていた。其の後は吉川勝太郎さんの息子さん大鼓石原清蔵さんとコンビでよく来て頂いた。竜田さんは小鼓を肩へかっいで打つ変ったかまへでした。

津市羽所町で薬剤師薬局、夫人は千鶴さん（古竹会）、一郎さんは謠のみ。千鶴さんは小鼓。黒川さん（素人）黒川氏病気の為医料代に小鼓を赤塚さんに買って頂き（上等品）故人になられ

惣司正直

岡田みね

た。千鶴さん若くして亡くなられ後主人が山口亮さんに（故人になられる）前に手放す事を話されたが値段的に話が合はず。

長袖会 赤塚亮一

妻と二人で羽所町で化粧品店営業。長田師に転居の時から二人共長袖会へ入られ長田師の夕食から一生懸命して居られ、素人会、長袖会事務局長やらでした。今は阿濃焼に専念していられる。赤塚一郎氏の弟

長袖会お光様の教祖 後藤、御夫妻 津駅の裏山に大きな堂場があり長袖会員になられた。

喜楽会

小妻隆文

津市大谷町の影見寺住職戦前高林吟二戦後喜楽会。長女と共に仕舞のお稽古にも熱心でした。津市では一番格の高い

お寺です。息子は高田高校の教師をしながら手伝人二人おき大変忙しい寺です。長女のり子さんも結婚する迄来ていられました。大部分は此のお寺での稽古、私もよく連れて下さった（此の寺の本堂へ一ぱい中尾家の物預かって頂き丸焼です）

和子の事

和子の田舎の貧乏生活やら二度とない事を先生に初めて書きます。お笑い下さい。

私は安芸郡美里村（前は長野村と言いました。三ヶ村より美里村）桂畑に生れ毎日小学校へ行く頃より弟の子守、五年生位から一年に三回養蚕をしましたので私と妹、夜中に起され桑を食べさす仕事、朝食後は学校へ行く

迄二時間位桑摘み帰へつてすぐ三十五分歩いて学校へ。学校から帰へると私は桑摘、妹は夕食の用意、寝る前九時より十時半迄蚕に桑を食べさすと云ふのが毎日で養蚕をしていない友達等がうらやましいでした。遊びに行く時は必ず背には弟等をおぶつて遊んでいました。弟の勝二が一寸半位の時母が(三十三才)心臓発作が起り、医者の手当早くてもどつて来ましたが十年は恐ろしくて仕事らしい事はせづ勝二は大きくなる迄私等が育てた様なもので津へ出て下宿する頃は蚕もかわない百姓のみでしたから兄弟も大きくなり大変楽になりました。

私等は遠足、奈良、大阪の旅行と云ふと草履二足作つてもらい夜中の十二時に起され学校へ父親に送られ友達らと学校を一時に出発。津へ七時に着。海岸で三時頃迄遊び帰るとき泣き出す子を先生がおぶったりして学校へ着くと親の顔を見ると動けなくなる状態でした。旅行は新町駅に草履をすて靴に履き替へ一番

電車に乗つて急行に押込まれやつと一泊して又帰りは五時頃より又歩く十二時頃学校着、親の顔を見ると泣けて来ました。わづかな小使で何にを買ったか覚えていません。其の時バスは一日二本片道七十銭で医者か金持ちしか乗らない。私も学校終り和裁洋裁を習い十九才頃より戦争がひどくなり県庁へ就職しました。初めて二十円給料を頂きましたので下宿代は自分で払へました。一ヶ月五円です。自炊をしていました。

私の結婚エピソード

私の祖母(母方)が二階建下と上と一間づつの家の借家に入っていました。其の時家主の親戚、中尾が焼出され頼んで二階一間をあけて頂きそこに親子が住む事になり(栄一喜雄)喜雄が手鍋下げて居るのが可愛そうに思ひ、私の孫が二十才で居ますがどうかと私を昼の間に祖母の所へ来る様に言つて来ました

ので何事かと思つて行きましたが別に話もなく帰へりましたが、その時喜雄は障子の穴からのぞき見して良いと言ふ事で私の知らない内に話が進み、十二月一日より始まり十五日に結納となり、私は帰へらず両親が受け、栄一は長野村の知人の弁護士に山下家を調べて一度も（私には何人の相談もなく、祖父母と親との間できめ、十三日頃に中尾に嫁に行くのだと言われ驚きました。結納は十五日にもらうと言われただけ全く他の人の様に思へました）（祖母は近くの家に引越、その下の間をあけてもらった）

女が顔を見づ心配してたそうで三十日に六帖一間の此の家で十人位の結婚式、私は本人も仲人も栄一も見事な、仲人か一才下で妻を爆死させ一人身で若く太った人で反対に細い人が居ましたが父が年取つて居たから仲人と思いました。

細長い人が横に座し式も終つて退場して下の部屋で初めて顔を見た事です。こんな結婚

であるかしら運が良かとのか五十五年置いて頂きました。其の間色々苦労は有りましたが私には子供なく父に付いて共に能樂に懸命でしたから嫁、姑の仲がうまく行つたのでしやう。子供はなかったが弟が二年生から始まり此の子の時代は食料がなくわら草履作りから始まり、結婚迄母親変り一つ上の神戸（山下）勝二が高校へ通学十一年間養子入結婚式翌日より悦子が来て帰へらず二人を置いて三十二才で他界、二人は二年三年これ又母親変り息子（養子）も子供居るので後妻も迎えず一人で頑張っています。私は今は孫娘が今年三月より短大も卒業し病院勤務で頑張っています。弟は西区の関西学院二年です。夕食のみ息子の食事用意（自分でやっています）（土日は休み）主人が死んでから楽に暮らせて頂き感謝しています。息子には氣を使いますがこれもぼけ防止です。自衛隊員は皆自分の事が出来るので助かります。

結婚式の出發からの事話します。此の頃は

カツラなく自髪で前日に髪結泊り短い髪を引張乍ら結ってもらい翌朝又結直して頂き、夕方五時頃出発タクシーは木炭車、炭二俵出して。其の頃進駐軍上陸で青空の川喜田四郎の家陳取、奈良街道を走り廻って（ジープで）たので危険と言つて見つけたら連れて行かれる心配で車の中は大きな風呂敷等ではり廻し、外は見えません。車が止まったら家の前、暗くなつて家に入りやつとでした。こんな気持ちを味わつた者は二人といないでしょう。

昔でもお見合にお茶を出し顔は見れなかつたとは聞くが、私のやうに盃を替わして初めて顔を見る二日帰へりに帰へり（栄一喜雄和子）叔母が可愛そうに余り細いので三年も持たないと泣いていたと後で聞きましたが、これも運命ですネ、七十才迄県銀行主婦の店と七十才迄一日も休んだ事なく来ました。最後の七年は寝たり起きたりで大変でしたが、余り世話の掛からない人でした。

中尾家も元の蔵町へ習年の四月に戻り敷舞

台も出来、お稽古も務め乍らやっていました。十四坪の制限の家でした。八千円で建った。父栄一、六十才銀行二度目の停年で一万円頂きすぐ建てられた由です。三十年に建替、舞台も桧で作りどうにか菊生師の稽古にも使い、いつ迄これが使へるかと段々淋しくなります。色々書きましたこれで今年は終り又新年より考へ書き送ります。年とり字を忘れ考へるのがいやですから、読みにくいが御免下さい。

明治三十三年よりの人番組から書出しました。

小林久左エ門

下里恒吉（忘目斉） 大正二年死亡により教

授より贈師範

三好能七

酌井長吉 伊勢市一色町ワキ師

酌井菊三郎

野崎尚直 中尾栄一の従兄弟 小鼓 津市

京口町に居たが二人共東京へ

野崎 瞭

(アキラ) 太鼓

川口鼓堂

津市東町で陶器店 此の人は芸

者の会で大鼓小鼓と二調で鼓を打っていた、とても珍しい人

荒木一作

喜多流教授

岡桜水(新六)

津市萬町 桜水楼(料理旅館)

代々今に続くが謡曲は俊次

岩本竹蔵

伊勢市宇治 岩本彩さんの父

大蔵流狂言師

岡 俊次

岡桜水の長男 喜多流教授

岡 茂雄

岡桜水の次男 四日市の小料理

店を開業し謡曲は戦後終り

小田半内

(晩翠) 津市玉置町 喜多流教授

で花は小原流教授

川井繁一

和歌山居住、喜多流職分 福岡

師の内弟子次代

佐藤 章

福岡師と職分 此の三人は内弟

子時代同じ

笠井金明

津市藤枝町で謡曲、笛、倉田金

森 大吉

三郎の先生
伊勢市一色町大鼓で津に大変お世話になった人

黒川秀峰

津市宿屋町で木綿問屋で戦前迄に皆遊んでなくした。大鼓、小鼓、太鼓と囃子方

阿保東鼓

津市東町で川口さんと同町で小鼓を教へられ戦後は謡もやめ小さな雜貨店で終った。

斉藤公平

斉宮出身 百五銀行勤め 和樂会の会員

中川宗一

津市片浜町で蒲鉾製造、最近は息子長男先生、次男も会社へ、

本人も故人、喜樂会会員

川村辰也

(白峯) 西新町百五銀行停年迄、後故人になる迄辻工務店勤務、

喜樂会の幹事で大変お世話になった人

橋本紅雲

百五銀行勤務で長男は現在、画家の大家で喜樂会の人(本人)

中根清郊

関町太鼓奥さんは静さん小鼓の上手な方、佐野徳司の叔父

小木久生

津市古河町太鼓を主として小鼓等も教へ乍ら県職員でした。

酌井彦市

一色町のワキ師

川北トヨ

津市北丸之内小鼓、私も五年程習い（故人になる迄）幸流お茶

藤原鳴耕

相可の郵便局長、停年後は村の宮司になられた。市川さんと同じ喜楽会員（御子の鳴耕）

裏教授で立派な先生でした。

町子（本名）

戦後色々の謡曲本や家具を頂戴し、今も懐かしく使はして頂いている

辻 正八

一志郡鵜村で小学校の先生をしながら喜楽会や習字の先生をし

村田みき子

津市京口町の紙問屋の娘で若松の酒造へ嫁がれた古竹会員

行方善一郎

丸之内ロープ畳表の商店主で青年時代より喜楽会で最後は三重

山本文子

津市山之瀬古より海岸町の白井へ嫁がれる子供の時は古竹会、戦後白井になり喜楽会へ、今も私にお稽古中

出口治有郎
龍田正松

伊勢市一色か通町のワキ師
一色の人か通町の狂言師か

清水与一郎

津市丸之内 現松菱の南隣の風呂ガス店を息子が。戦前は大きな角与と言ふ商店で今で大地主。

喜楽会の古い人

小森幸雄

津市一身田大きな旅館料理店へ一志郡中川から養子に入り百五

喜楽会員

須子芳夫

銀行勤め停年後岡藤へ謡は後藤師菊生師も大変ほめられ立派な

山岡順造

謠いであつた。

先々代は上浜町でしたが先代より柳山町にvari下駄用品の商売でしたが息子が中学校の教師になり年もとり店もやめ自分は腰が二つ折れになり喜樂会には謠いだけは出られます。

榎得兵衛

久居市の酒製造初日社長であつたが、今は息子の時代で長かつた謠もやめ家に居られる

青木長夫

栄町青木薬局で三重大三重病院調剤薬局で多忙の中、謠にはとても熱心で喜樂会の世話役でよくして下さり私は大変助かつています。

神戸勝二

片田町の代々特定郵便局へ養子に入り、今は後二年で停年前でとても多忙で喜樂会の時のみ顔合わすだけで会の役に立ちません。2年待ったら一生懸命させ

山田 寛

ます。

弁護士で謠い舞はとても下手でしたが熱心でした。公正人役場をして最後でした。

岡本 茂

岡本町（芸濃）この人も養子に入り田舎の大家で百五へ勤務しながら謠のみでとても熱心の人でした。

鈴木重郎

鈴鹿市白子のふとん屋の主人で謠舞と熱心で白子の大先生で喜樂会へ弟子を多くさん連れてきて賑やかな人でした。故人になられたら喜多流は皆なくなり今は淋しいです。

横井鈴江

弁護士のおさんとで謠、舞は姉さんの観世の型で舞って父によく直されていた。

阿部眞一

大門の三華堂洋菓店眞三チエと子供と共に喜樂会の頭の低い方でした。

阿部喜平

岩鶴多瑛

上浜町で橋本家に並ぶ醤油製造で子供三人で熱心でした。今は裏はマンションにして貸し、裏は戦災で焼残った為、無形文化財に指定され残っています。

三観音の一つの大門津観音を守られてゐる大宝院の奥さんで謠、舞、小鼓と多忙でも熱心でした。院主蜜雲は東北大出で学者高野山大学教授で字が上手、非常に温厚な方、唯々観音様をお守りしていられたが子供なく岐阜の寺より養子が来られ今度は今風に金を集める事が上手で近頃は観音さんも人出多くなり、又人付合もよく朝帰り多く両親は大変心配していられましたが時代の波に乗っていかれます。よい人物です。人気もあります。蜜雄さんです。

萩野桂石（健児）

息桂一

田中孝磨

三重県警勤務で名張ぶどう酒事件の検事で新聞裁判と戦われた人です。

停年迄に片付かず親子共謡曲に子方にと喜楽会で堅い人でした。観音寺町久居農林教授で此の人は色々の免状を集める趣味でお花謡税理士（中退）能面、権禰宜資格を取る為、皇学館大学へ一年通い、今はパートで結城神社へ昨年一年全部の稽古事は休み亀山市の（出身地）幼稚園の設立に掛かりましたが土地買上資金作り等で一生懸命でしたが国の許可を得るのに大変らしく思い返して謡、舞だけ喜楽会へ戻られました。

多田安郎

高山神社宮司代々高虎公を守護され喜多流（古竹会喜楽会）で四月十月の祭礼には毎年奉納し

俳号

昭四十八年十月二日歿

俗名栄一 八十六才

明一九一九年九月十九日生

ていますが喜樂会のみになりましたが謡と仕舞で最初に弓八幡を一番謡い、後は仕舞、謡いと三時間奉納して帰ります。此の奉納をしないと会員が死ぬと言われる三人になる迄と祈っています。安郎さんと母の静子さん喜樂会に稽古に通っていました。

中尾平兵衛

藤井六三郎の名は、大蔵流狂言宗家に入門し、藤井六三郎に付き稽古其の後藤井六三郎の名を許され頂戴し使っていた。花末生流家元目代津高等女学校で教へていたかたわら絵も共に教えた。北町野口屋と言ふ旅館をしていた為栄一は野口と時々使っていた。

明三十四年 二十五号「篁汀」

先夜は色々御指導ありがとうございました。岩本さんも七十七才迄家庭へ入った事なく色々のお稽古事で楽しんでいられたのが家の嫁さんが難病にかかり七月頃より主婦專業となりお稽古事も喜樂会のみ残し全部断りで長い鼓もやめられました。

先日四日の三重県大会も高令者ばかりで若年が居ません。段々会員もへり淋しい事です。私方も神戸が退職し七月より皆と一緒に稽古に懸命です。中尾にとつても安心していきます。お蔭で私宅には大阪菊生会のビデオが十五年間収録してあり約百本位、それを元に会員も稽古しています。早く菊生師より手を引きましたが今、大阪の稽古場の幹事が苦勞してい

ます。病氣と八十才の高令で足が悪く思ふ様に出来ない為氣短になりそのお守りが大變です。私も其の年に近くなり毎週土曜のみ休みでぼつぼつやっています。津觀音のパンフレットと福井師のと同封しました。御参考迄にお送りします。

中尾の事を記します。今迄の書面と重複した所もあると思いますが悪しからず聞いていた事や私が前々より調べた事など書いて見ます。中尾家の先祖は慶長十三年（一六〇八年）関ヶ原の合戦で武功を認められ旧領の伊予（多ひめ県）より二十二万石を与えへられ高虎が津城に入城した時、戦火で焼かれて衰退していた町には五〇〇戸しか残っていません。高虎公と一緒に入城し其の時は京口門に住居が与へられたと聞いています。其後北町一宿屋町迄旅籠八十軒を高虎が許した其の一軒北町に芸者の置屋を持つ世々野口屋と称し

名ある旅館なり。平兵衛以前の事は寺の過去帳も皆焼け只私が戦後に石碑より書き写してあるが誰れの戒名か不明、年号も天保以前は消えてわからずこれを家に過去帳として残しています。

平兵衛は幼少の頃より絵がすきで野田半谷池田雲樵に師事し山水が最も妙なり能楽も志し大蔵流藤井の門に入りて狂言を師事、藤井六三郎の称号を許さる。又花道に精通し、未生流の秘訣を修め家元目代職を許されたり後に津に女学校が（現三重県立津高）を創立せらるるや召されて絵画並に花道教授となり明治三十五年二月五日六十三才に歿す（天保十一年生れ）平兵衛四男五女の子を持ち四男栄一が中尾をつぐ、（栄一には五男一女の子供アリ、三男四男幼少二才頃死亡）旅館は平兵衛死後人手に渡る。栄一母と二人で別の所北町に住み、高等小学校卒で百五銀行（現大門町）に入学し着物姿頭取は、此の時頭取、川

喜田四郎兵衛築地より毎日馬に乗って出勤、松の木に（門前に）つないで、馬子は一日中（三時迄）馬の守りでした。（栄一銀行へ勤め乍ら夜間中学卒）

栄一は八才位より謠いを平兵衛に習い二十才位より舞は後藤師、謠は福岡師高林吟二師に毎月の稽古で大正四年に東京より金子亀五郎師範が伊勢へ来て（其時伊勢支店長で）謠一番舞一番のテストでそれに合格し金子氏の取立で教授が許可されました。今の私の頃は後藤師福岡師の二人の取立で教授を許されました。栄一も其間には支店長として上野亀山鳥羽伊勢松阪名古屋上前津岩井町支店、名古屋支店と転々としていました。其の土地土地に弟子が出来、方々から寄って立派な喜楽会がいつも出来たと言っていました。

特に岩井町支店長の時は景気悪く不債多く三年で改集して本店へ転勤の時は頭取から特

別に表彰され銀杯頂戴したそうです。五十五才で停年でしたが、特別に業務参与として五年本店営業部長となり六十才で退職。其の後二年位川喜田四郎兵衛の理事として奥の会計をし六十三才から七十才迄（百五の五階に）銀行協会理事としてお稽古と共に専念していました。死ぬ迄後藤師福岡師におけいこを受けていました。其頃は私と二人で絵も京都より梅丘絵師を招き毎月夫婦で習っていた。平兵衛喜楽済の軸も一本づつ焼残りこれも裏の銀行の大金庫に三年入っていて小使さんが軸ばかり二十五本位かつて来て頂き驚きました。預け主の母が爆死して何もわからず庭には食器類とぬり物とか大きな木箱（タバコ）に七年石をのけてたら出て来ました。

お茶は表流銀行時代半泥子が自宅（千宗家）を毎月二回よび重役達のお稽古で半泥子とは特別心安く色々の物を頂きましたが其の頃は余り名もなく只好きで焼いたり書いたりで余

り評価されなかったのが今は全国で奇人展等で名を上げています。

喜樂斎は能は高林師に多くさん教へを受けたそうで重習いの手付等は残っていますが自分も手付をくわへ書きしております。

壮太郎頭取にも数年仕へました此の人は洋画で余り名は上りませんでした。

これで平兵衛喜樂斎の事は私の聞いていた事のみ書きました。判読して下さい。七十七才ともなると字も忘れ情けないです。よろしくお正月過ぎると又忘れますので早速思いつくままに書きました。先がいそがれます。

神戸（私の弟）も高校に通学不便な為、中尾へ来て通つていて同志社大学へ進み能楽部観世流四年間修業し帰ってから津岡三證券へ通いながら喜多流に変わり父や福岡師後藤師栗谷師に稽古今は郵便局長も六月で退職。毎週私宅で会員と一緒に稽古していますので

私の後をつぎ喜樂会を守ってくれますので私も安心です。

神戸は元山下ですが岡三で三年位勤め、二十五才の時に津市片田町の神戸へ養子に入り郵便局へ勤務。謠いは続ける約束で養子に入りました。私宅に十一年住んでいました。神戸が養子に行つた翌日より私の里より弟の長女悦子が三才から中尾の栄一がすきで来ていてとうとう中尾の娘として養子を迎へ三十二才で他界子供二年三年の二人を残し平成元年に。主人は二年より肺炎が始まりで九年年迄寝たり起きたりの生活で私は食事の世話、病人と子供と謠を続けながら来しました。九年に主人死亡孫は短大今年三月り鈴鹿の病院へ勤務、弟は西宮の関西学院大学二年ですが、私も七十六才今でも食事用意朝五時に起き弁当作りをして孫娘を出しています。私の子供として五人を母親変りとして育てて来ましたが最後に一人位は近寄つて来ると思っています

すが老人ホームに入れたら一番良さそうに思っています。

だんだん淋しくなつて来ます。先生はまだお若いから頑張つて下さい。助川師も今夏は弱つていられた由、もう年ですかネ。池山幸さん、津の女学校から大阪の医大へ行き卒業後クゼの日赤に勤務田丸に少し残してあつた土地へ開業し三年位前に足が悪くなり手術。今は杖なしで歩けない、すわれない毎日で只能を見に行くだけの楽しみで一人淋しいが只金曜日夜前、保道会員が寄つて謡を合同で謡つていられるのか楽しみですと言つていられます。

色々な事書いてご免なさい。先生の知りたい事がありましたら又今度は名古屋の次男さんに聞きますが私主人のいない後も年賀状は出していますし話もした事もありますから聞いた事のみ御判読して下さい。思いつくまま書きました。悪しからづ

東海忠生

父古竹（本名東海六郎右衛門）は喜多流能楽の教授として生涯を送りました。明治から昭和に至る間、平和な時代から、さきの不幸な太平洋戦争による苦難の時代に生き、私共八人の子供を育ててもらつた事は並々ならぬ苦労があつた事と思います。その影には云う迄もなく母の内助の功があつての事です。

父は厳格な性格で近寄り難い感がありました。又、大変器用でした。何事にも熱心で謡は人生の中心でした。謡の稽古以外では多趣味でした。小鳥等、生き物を飼うのが大変好きでした。

過去の日本は戦争に遭遇した時代が多く、その都度、家計にも影響する事になり、表具師・古物商・茶小売商などを自営し苦難を乗り切りました。

この様な時代を過して謡は大黒柱の様なものでした。

父の跡継ぎとなる為、修一（長男）は小学

校三年生の時に東京目黒の家元へ、内弟子として能楽の道に入りました。二十才にて兵役につき除隊後、二、三年後には太平洋戦争の為に召集を受けビルマ（現ミャンマー）へ渡り、戦場となったインパール作戦にて、タウンタ三〇六高地の激戦で戦死しました。後日戦死公報が届いた時は皆驚くと共に、父の心中を想うと絶えられない気持ちでした。父は何時頃から謡の先生について稽古を受けたかは、私は記憶していません。

謡曲教授としては津市近郊では知名度は高かった様です。郵便物の宛名が津市、東海古竹宛で届いた事でもよく知られていた事であったと思っています。

父は一八八二年（明治十四年）に出生、一九六八年（昭和四十三年）八十六才にて世を去りました。今思うと、私共には偉大な父でした。

謡の稽古

私は物心がついた時には絶えず謡の稽古の声が耳についていました。私は十才位の頃津市の桜水樓という所で羽衣の仕舞を父から稽古を受けて舞った覚えがあります。時々そこでは謡の会が催されました。また家元からは後藤得三先生や伊藤千六先生もよく来津されていた、一九三五年（昭和十年）頃の時代です。

私は終戦の一九四五年（昭和二十年）軍隊から戻り、その頃から夜になると、毎日父から謡の稽古を受けました。家へこられるお弟子さん達へはやさしい教え方でしたが私の稽古は大変厳しくよく怒られたものです。お弟子さんの何度も違いを直されている声を聞いては自分の時の参考になりました。

喜多流普及会という会もあり、夜大勢のお弟子さん達がシテ・ツレ・ワキ・地謡等の役割りをしての稽古が暫々ありました。自宅で

の稽古は毎週火曜日と金曜日でした。他の日は出稽古で津市郊外へは人力車で往復するという時代もありました。

一九五五年（昭和三十年）頃から姉（長女前田光子）も謡の稽古に來宅し、私と二人で父から稽古を受けました。その時は一人で稽古を受ける時よりは楽な思いがしました。夕方になると勤を終えたお弟子さんが次から次への來宅で夕食も父だけは大変遅くなりました。夏の夜の稽古中、近所の人々は縁台を歩道へ出してのんびり夕涼みをしている時に、父は謡の稽古で気の毒でした。

夏の稽古は汗の為何度も着物を着替えて教えていました。冬の夜稽古で遅くなり父だけの食事の時は、私はそばに寄り添い時々おかずを食べさせてもらったり、父の大好きな酒を少々吞まされた、四才頃の思い出があり、子ぼんのうな所もあつた父でした。

津市・高山神社祭礼の能樂の奉納

戦前は春と秋、年に二回津城のあつた境内の高山神社能樂堂で春は仕舞、舞、囃子、秋は能が奉納されました。普段父に稽古を受けたお弟子さん全員が出演するのです。その準備は忙しく、出演者の着付等は父が中心となり、舞台裏は大変です。地謡の地頭には殆ど出ていたので大変な行事でした。

前日から用意された、むしろ敷の見所は無料の為、大入満員で立見も出る程の盛会でした。附近には屋台店も多数出て大変な賑わいでした。この行事は戦前は毎年続きました。能樂堂は太平洋戦争で焼失しました。

茶小売商の頃

一九三七年（昭和十二年）に日中戦争が始まり一九三九年（昭和十四年）頃から世の中も不景氣となり世相も落ち付かなく、お弟子

さんも序々に減少し家計にも響いてきました。そこで父は、お茶の小売業を始める事となり、家の玄関を店舗に改造し開店迄は大変でした。茶袋は父の指示で家内皆で手作りしたものです。

日曜日は、私の役割りが沢山ありました。

先ず朝はお得意さん廻りで市内を自転車走らせ注文をとりに行き、注文があればすぐ届けるのです。

抹茶の注文があると、父と交代で抹茶専用の石臼で、何時間もかけてゆっくりひくのがよい抹茶が出来上ります。早速又ひき立てを配達していました。

また月末には集金にも私が行きました。仕事の手伝いは当時としては当然の事で、何の報酬もありませんでした。夏の暑い日中など店の売上金を少し頂戴しアイスクリーム等をこっそり食べた事があります。茶小売業は太平洋戦争の終る少し前までは営業をしていました。

父が謡から離れた時

父は、うぐいすを飼うのが大変好きでした。すり餌は総て手作りでした。乾燥した小鮒を石臼でひき、次は大豆を炒ってこれも石臼でひきます。あとは大根の葉をすりつぶし水をまぜ、こね廻してすり餌は完成です。他にも、目じろ、ほほじろ、ひばり等を飼いました。或夏、父の不在時に、うぐいすの水浴びをさせる様云われ水浴び用の鳥かごに入れ替える時、外へ逃げだし、家の縁の下に逃げ込みました。苦勞して捕獲した時程、身のちぢむ覚えをした事がありました。父の大切なうぐいすを逃さず済んで大変な事にならずほっとしたものです。又、蛙の一種で、かじかを一匹飼っていました。夏は何匹かガラス戸に止まるので両手で取ってはかじかに食べさせ様父から手伝わされました。鳥のうちでもひばりは朝早くから鳴くので休日なども早く目ざめ困りました。

父は海が大好きで、子供の頃津の海まで二、三十分程歩いた時は子供には大変でした。いろいろな泳ぎ方を教はり、中学へ入り、平泳ぎで五軒約二時間三十分程の遠泳試験に合格したのは父のお蔭でした。

父の最後の舞台

一九五五年（昭和三十年一月十五日）東京目黒に喜多能楽堂の落成の能会がありました。私は父、母と姉と東京へ参りました。当日は大変な大雪でした。喜多六平太師の舞われた白式能翁にはびつたりの吉日となりました。父はその日の出演で、岩船の仕舞を舞い晴舞台を飾りましたのが最後でした。

清水 美穂

平成二十二年

わたくしは初代杵屋三太郎の孫（＊藤田流笛方小島鉄次郎長女）に当たる松田直子さんのお世話をしております。今年の三月に九十六歳になられ（大正三年生まれ）とてもお元気でしたが、この夏の初めに脳出血で倒れ、今も岐阜県関市内の病院で静養中です。彼女もおじいさまの血を受け継いで、三味線一筋に生きてこられました。意識が戻られてからは、毎日病床で長唄演奏のテープに耳を傾けておられます。

松田直子さんは初代三太郎の息子鉄次郎の娘で、幼いころに鵜飼家の養女になりました。わたくしはその鵜飼家の関係の従兄弟に当たる鎌田政志の娘です。ここ数年、身寄りのない松田さんと親しくして参りましたが、お年をとられるにつれて、三太郎おじいさまのお話が多くなりました。もしわたくしどもの知らぬ資料や、それを基にしたご研究などがご

ざいますようなら、教えていただけるとありがたいです。生涯彼女が敬愛してやまなかった三太郎おじいさまのお話を、聞かせてあげたいと思います。

突然のお願いで申し訳ありませんが、直子さんの病状も予断を許さず、何といつてもご高齢ですので、どうぞよろしくお願いいたします。〈八月二十一日〉

貿易や金融などに携わっておられた鉄次郎さんは、比較的遅く笛を吹くようになられたときいています。

お手紙でお送りした写真も、いつどこで撮られたものかはつきりしません。熱田の能楽堂ではないかと思いますがいかがでしょう？

そういえば鉄次郎さんゆかりの笛が我が家にあります。わたくしの主人が少し長唄をかじっております、松田直子さんが持つてお

られたその笛を譲り受けました。（＊笛は奥様のものでした。）

それから、鉄次郎さんの御養子はたしかに小島清さんです。松田直子さんは鉄次郎さんの若きころの実子です。まだ、鉄次郎さんが同志社大学の学生さんだったころ、伊勢の女性と親しくなり、生まれたのが直子さんでした。（＊一八九二年生まれの鉄次郎が二十二歳のとき十歳年上の女性との間に一九一四年直子さんが生まれました。）

三太郎は息子の恋愛を認めず、生まれたばかりの直子さんを、自分の弟子だった鵜飼春の経営する春庄という待合（現在の名古屋市中区三丁目、当時の住吉町）に養女に出しました。（＊最初に養女に出された家は広瀬家でそのあと何歳のころか正確にはわかりませんが鵜飼家にもられました。）

そこで直子さんは幼いころから三味線を習い、十代後半から毎月京都に通い山田抄太郎氏に教えを受けました。

二十三歳のとき杵屋六直代（余）の名をとりましたが、そのころより腎臓病を病み、芸で身を立てることをあきらめたと聞いております。

芸者さんの意気のひとつ、「人間関係を大切にする」という気持ちを、直子さんも生涯持ち続けられました。

自分自身は養女に出され、鉄次郎さんは養子を取ったのですから、小島清氏と直子さんとは血のつながりも何もないのに、このお二人は稀に見る中のよい姉弟でした。

わたくしは一九七四年から七八年まで東京の学校に行っておりましたが、当時直子さんが住んでいた四谷のお宅に、小島さんはしばしば遊びにきていらつしやいました。

昨年秋に、直子さんが関市に来てくださったのを機会に、そのご挨拶を兼ねて小金井に住む小島さんを十一月にお訪ねしました。小島さんは胃潰瘍で九月に入院されましたが、いったん退院され、お家で静養されていると

きのことです。このときは、比較のお元気で、わたくしが直子さん移住の顛末を説明しますと、「姉さんをくれぐれもよろしく」と、頼まれました。

年明けて一月七日に小島さんは亡くなりました。お通夜とお葬式に参列しましたが、そのとき亡くなる前夜に書かれた原稿の写しをいただきました。

小島さんは晩年眼が不自由になり、資料を読むこともままならぬ中で、最後の夜まで研究を続けておられたという姿に、わたくしも深い感動を覚えました。

彼は貧しい家の生まれで、幼いころより勉強のできる方だったので、小島家に養子に迎えられる学校に行かせてもらったということでした。

ただ、小島家で暮らしたということは、常に芸事の傍にいたということで、小島さん自身謡曲を嗜まれ、大変声のよい方でした。

初世三太郎の子供は関山くわ（西川小松）

との間に三人で、けふ（中村）、小島鉄次郎、あり（竹本）です。けふ子さんは中村白葉の奥さんになり杵屋三叟を継いでいます。

「人間関係を大切に」された直子さんの交友関係をたどりますと、場面はまるで小説の世界のように広がっていきます。もう少し追ってみようと思っています。へ八月二十二日へ

残念なことに、鉄次郎ゆかりの能管はございません。直子さんがいつだったか「頭に鈴虫のある笛があったけれど、行方がわからないう」といつておられたような気がします。

夫がいただいたものは、篠笛で一番、二番、三番という長いものと、七番が二本です。昔のつくりで今のものとは音の高さが少し違います。

これは、鉄次郎さんが吹いておられたものではなく、七本調子のもののうち、一本はきれいに丸く整えられた細い桜の皮でまかれて

います。（＊これは小島まささんの笛だということが判明いたしました。奥様のまささんは福井出身の笛の名手だったそうです。）

松田さんは一九八〇年代の初めから昨年まで名古屋に住んでおられました。それも椋山女学園のすぐ近くに・・・昨年六月に転倒して入院し、体が不自由になりましたので、十月に關市に移られました。というわけで、彼女の持ち物をお預かりしています。まだテープやオーブリールは内容を確認していません。お年の割りに機械を扱うことのお好きの方です。

ドイツ人が録音したという初世三太郎の演奏の話はご存知ですか？これは直子さんに直接聞いたお話ですが、やぐらを組んでその上でひやひやしながら演奏したということです。そんな録音が出てくると面白いですね。（＊一九〇三年に英国グラムフォン&タイプライター（現EMI）が派遣したフレッド・ガイスターが録音したものと思われます。）へ八月

二十六日

先週末に、直子さんの状態が急変し、再び
こん睡状態になりました。

そして、二十九日日曜日の午後、静かに息
を引き取られました。享年九十六歳でした。

この暑い夏が、直子さんを連れて行つてし
まったような気がして、途方にくれています。
まずはお知らせまで。へ八月三十一日

渡辺義雄『私の音楽生活』（昭和四十六
年発行）より転載

「熊野」のクセ

私が能楽の道に足を踏み込んだのは、まっ
たくヒョンなはずからである。

そのころ謡のけいこにやや熱が上がりはじ
めていた父が、友人数人をかたらって、仕舞
のけいこを始めたのは、私が小学校三年生の
秋のことであつた。

当時、明治四十一年のことだが、郷里の名
古屋市（御園座のすぐ西側）に住んでいたの
であるが、そのころ名古屋在住ただひとりの
観世流の立ち方であつた青山先生が、わが家
まで出向いて下さつたのであつた。―青山先
生は、本姓を小寺といわれ、本業の砂糖問屋
の方は、奥さまと番頭さんに任せて、もっぱ
ら斯道興隆のために出精されていたお方であ

つたのである。

さて、最初のおけいこは「熊野」のクセであつた。座敷のすみにチョコンとすわつて、何人ものオトナがいれかわりたちかわり先生の謡につれて「立ち出でて峰の雲…」とおけいこをするのを、何度も何度もジーツと見ているうちに、手足の動かし方がどうやら私の頭にはいつてしまった。

次のおけいこの日が来た。

前回と同じく、座敷の一隅にすわつて見ていたところ、オトナたちがサッパリ覚えておらず、頭ばかりかいてるのを見て、無邪気に、しかし、いささか得意顔に、私は「ボク覚えてるよ」といつてしまったのであつた。——当然「やつてごらん」ということになり、どうやら無事舞い納めることができたので、私もおけいこの仲間入りさせてもらうことになった。

こうして、私と能楽との長い長い関係が始まつたわけであるが、三四ヶ月たつたら、青山先生は私ひとりだけのために、わが家へ出向かれるようになってしまった。

それは、今（昭和四十六年）から六十三年も前のことになる。

「三井寺」の子方

仕舞のけいこはよく続いた。よく飽きもせず続いたものだ、今日からふりかえつても、感心している。おけいこの日を別にいやがつて逃げたような記憶もない。

こうして一年あまりたったころ、京都から片山九郎三郎先生を迎えて、久方ぶりに能会が催されることとなった。

今でこそ名古屋市には、熱田神宮の境内にりっぱな能楽殿が建てられ、観客席も完備しているが、明治末年のそのころは、東照宮の境内に能舞台があつたものの、そこはただ舞

台があつたというだけで、能会があるとなる
と、丸太を組みよしずやテントを張つて、見
所（けんしょ、当時客席をそう呼んでいた）
を仮設したものであつた。

ちなみに、最近読んだ書物によると、当時
の呼称で中区門前町というところにあつた県
立愛知博物館（今はない）の構内にも能舞台
があつたとある。明治二十七年に建てられ
たと書いてある。そういえば一度そこで能見物
をしたような気がするが……。

ペンが横道にそれたが、そのときの片山先
生のだしものの中に「三井寺」があつた。そ
して、その子方は「現地調達」ということだ
つたそうで、その役が私に振りあてられた。
—といつても、別に選考の結果といつたよう
なわけではなく、当時観世流の仕舞のおけいこ
をしていたこどもが、たまたま私ひとりしか
なかつたからである。

ところが、この決定を、父の謡の先生であ

る松浦羽州先生（俳句の道でも名の聞えた宗
匠だったと聞き覚えてゐる）の知るところと
なり、正式に謡をけいこするよう父にいい渡
され、高弟の須野崎という方を出げいに取
り計らつて下さったので、私の日課には謡が
一科目ふえてしまった。こうして、私の謡曲
史の第二ページが開かれた。

須野崎先生は、旧尾張藩でも中以上の階級
の家の出で、東区白壁町にあつた旧藩時代か
らのお宅は、ずいぶんと広い地積があり、大
木の生い茂つた庭で、百代（かずよ）さん
というおない年のお嬢さんといっしょに、ワ
ラビ狩をした思い出があるほどである。

それはさておき、当時の先生は、執達吏と
いう役人をしておられた。りっぱな八字ひげ
をはやしておられ、長身を金ボタンの制服に
包まれ、役所からの帰りみちに、わが家によ
られるのであつた。その姿が人目につくし、
また世間態もよくないということで、いっそ
のことこれを機会に専門の師範になつてはと

父がすすめ、松浦先生にも話したところ、羽州先生もご賛成でさっそく家元（清廉先生）にその手続きをとられることになった。

こないきさつで、須野崎先生は、間もなく役所勤めをやめて、職分となられたのであったが、私は、須野崎門第一号の弟子ということになった。父もずいぶんと骨折って、お弟子の勧誘をしたようであつた。

なお、附記しておきたいことは、仕舞を習い謡をけいこするようになって、私の持病であつた胃病―なにしる、小学一年生のときは、断続的ではあつたが、半分は休んだほどであつた―がスツカリなおつてしまったことである。今でもありがたく思っている。

「鞍馬天狗」の子方

明治四十二年の秋のことであつた。
前年の初夏に尾張徳川の侯爵家を継がれた

徳川慶親さん、後年マレーの虎狩りで勇名を馳せられたあの徳川さんが、先代侯爵の令嬢と結婚され、襲爵と結婚のご披露の宴が行なわれ、その際余興として数番の能が演ぜられた。そのなかの一番に京都から招かれて来名された大江又三郎先生（先代）の出し物「鞍馬天狗」があつた。例によつてその子方牛若丸の役が私にまわつて来て、それをつとめるよう青山先生からいわれた。

演能の場所は、名古屋市東区にあつた徳川家のお屋敷で、いまその一郭は名古屋市営結婚式場「徳川園」や博物館の所在地となつてゐる。もちろん本格的の舞台はなく、大広間のたたみの上を青竹でしきつて作った、仮設の舞台であつた。

滞りなく演能が終わり、別室でお祝いのおぜんにすわり、そのあと人力車（鉄製の車輪からソリッド・タイヤに代わつたころのことである）で家まで送つていただいたのであつたが、話はその翌日のことである。

羽織袴に威儀を正した徳川家の家従が、わが家を訪れた。その時間には、もちろん、私は学校に行っていて在宅しているわけではないのであるが、学校からかえって来ると、母が「きよう徳川さまから結構なものをいただきたいんだヨ」といいながら、出して見せてくれたのが、奉書紙をきれいに折りたたみ、水引をかけのしをつけたものであった。そして、りっぱな字で「金五百疋也」と黒々と書かれてあった。その中には金一円二十五銭也がはいっていた。当時としては大金であった。

これが、私が自分の労働ではじめて手にした報酬であって、記念すべき収入であった。――参考までに、そのころのゼニのねうちを例示してみよう。活動写真（久しぶりにこの字を書くが）を見に行くことを許され、十銭銀貨を与えられたときは、たいへん喜んだものである。なにしろ六銭で二階の特等席にはいることができる上、二銭でラムネを飲み、二

銭でケーキと称する焼き菓子――直径十センチぐらい、厚さ三センチぐらい、上部表面にピーナッツを割ったのがいっぱいいていた――をおいしく食べることができたのであった。

筆のついでに書き添えておくが、翌年の秋のことだったと覚えているが、愛知県海部郡十四山村（先年の伊勢湾台風のときよく名が出たところ）に、須野崎先生のお弟子が十数名で、第一回の謡会が同村の某氏宅で開かれた。もちろん、先生は当然臨席されたのであるが、私を同行してくれという先方の依頼があったとかで、私も先生に随行してその会に出席した。仕舞を二三番舞ったり、独吟をしたりしたと覚えている。

クリーク地帯として知られた同村へ行くので、関西線の弥富駅で下車し、近くの乗場で迎いの小舟に乗って行ったのであったが、帰途、おりからの月明に水面が銀色に光り、イナがはねて船中に飛び込んで来たことが、今

でも鮮やかに記憶に残っている。

そのとき、お札と書いた紙包みを頂いて来たが、帰宅して開いてみてびっくりした。なんと金五円もはいつていたのである。これが第二回の労働収入であった。

「箴」のシテ―初能―

前にも記したとおり、そのころの名古屋市には、見所のある能楽堂というものがなかったのであるが、それが明治四十二年の秋に建設されることになった。

少年の日のできごととして、だれの発起で、まただれの出資で、この能楽堂が建設される運びとなったかも知らん知る由もなく、いっこうに覚えていない。あるいは愛知博物館の構内にあった舞台が移されたのではなかったかと、今になってそう思うことがある。

建てられた場所は、私が住んでいた当時の

呼称で研屋町と交わる呉服町の二丁目の「閑所」（かんしょ。名古屋特有のことばでいわゆる「路次」にあたる）の奥であった。私の家からわずか三百メートルぐらい離れたところで、閑所の入口の片側には紅村という当時あった伊藤銀行の支配人の家で、その長男清彦君（後年写真の大家として名を成した）とは同級生でよく遊びに行つたものだ。

さて、この名古屋能楽堂の落成を祝つて、盛大に能会が催されたことは言をまたないところだが、どなたが来園され、なにを舞われたか、さらに記憶がない。ちなみに、この能楽堂は、昭和年代にはいつてから東区布池町に移されたが、戦災で焼失してしまつてゐる。ところで、その翌年の春四月、名古屋観世会の第一回能会が開かれたが、この機会に、私は「箴」のシテを演じたのであった。いわゆる初能（ういのう）というわけである。

青山先生からは型を、須野崎先生からは謡

を、いつも出げいこを願つて猛練習をした：と記憶している会の三日ばかり前に舞台でけいこをしたが、前日には「申し合わせ」といつて、ワキ役の方、地謡方、はやし方全員が集まり、舞台げいこをしたのであるが、そのとき私は衣装をつけるのを略してはかま姿でやつたのだが、これが当日飛んでもない失敗をやらかすもとなつた。

会の当日となつた。

こどものこととて「直面」（ひためん。能面を用いないこと）で衣装をシツカリ着けてもらい、鏡座でじゅうぶんに呼吸を整える。幕が上がる。次第のハヤシに連れて橋掛りを過ぎて本舞台に入り、「来る年の矢の生田川：」とうたい、下歌上歌、ワキとの問答もすみ、クリ、サシ、クセ、ロンギと順調に進んで中入となり、楽屋で着付けを改めて後シテの出となり、だんだんに進んで「紅煙の旗をなびかせて：」とキリとなつたが、ここでハツタ

と困つたことがもちあがつた。

「郷党三騎にうしろを合わせ」と謡いながら腰の太刀を抜く所作があるが、日ごろのけいこにも、前日の申し合わせにも、太刀を持つことなく、いつも舞扇をたんだものを代用として所作をしており、本物の太刀を扱うのは、このときが最初であつた。

ところで、能の衣装小道具には特にこども用というものがなく、この太刀も普通の長さではあつたろうが、十一歳の私にとっては、まことに長過ぎて、とうてい抜けるものではなかつた。「郷党三騎に」とうたつたところで謡をやめ手も止めて立ち往生をしていると、後見が立つてきて太刀を抜いてくれたので、そのまま「うしろを合わせ」とつづきを謡い、どうやら無事舞い納めることができた。見所からは大きな拍手がおこつた。

謡を止めて後見の助けを待ち、しかもそのままあとを続けるとは、なかなか度胸がよいと、見当違いのお褒めのことばをいただいた

ものであつた。

写真の台紙にある父の筆によると、明治四十三年四月、私の小学五年のときのことである。

仮設の見物席で観能した頃はもちろん、こうして恒久的な見所のある舞台ができたころでも、食堂という設備は全くなく、特別の便宜のない限り、観能客は弁当を用意して出さなければならなかつた。

そのころの能会は必らず五番建てで、電灯もまだ暗い時代だったので、たいてい朝九時ないし九時半開演というのが普通だつた。そんなわけで、観能の日の台所方は弁当作りでたいへんであつた。母に言わせると、娘時代の芝居見物の日と同じだつたそうだと。

わが家には割子弁当（二段重ねの漆器）五個と茶器や小皿を格納する木箱があり、それを持参して舞台に急ぐのであつた。玉子焼やかまぼこ、あるいは甘煮のはいった弁当は、たいへんな楽しみであつた。

「四音会」の思い出

そのころ、名古屋市に「四音会」と称する勉強会が生まれた。その名がズバリ示しているように、笛・小鼓・大鼓・太鼓の四つの音を扱う「はやし方」の団体で、毎月十七日の午後五時に、会場東照宮の社務所に集まり、勉強をしたのであつた。各流（といっても観世宝生金剛の三流だけ）の立ち方と地謡方も参加したわけであつた。会費が二十銭だつたことを覚えているが、夕食には、二十センチ角ぐらいの「へぎ」に赤飯とおかずを盛つたのが出されたが、これが少年の私にはひじょうな楽しみであつた。殊に、夏になると「メソ」と呼ばれた細いうなぎの蒲焼がついており、これがたいへんおいしかったことを、今でも鮮やかに覚えてゐる。

例会（八月だけ休んだが）では舞いばやしを十番か十一番演ぜられるのが普通だつたが、

これを、観世五六番・宝生三四番・金剛一二番の割合で分担していた。この割合は、当時の名古屋市内外における各流の勢力分布状況をあらわしたものといつてよろしかろう。これ以外の流儀、つまり金春と喜多はまるで無かったようであつた。

そんなように、観世流が名古屋市やその近郊で能楽人口の首座を占めていたとはいふものの、立ち方は、仕舞のけいこを始められたばかりの人をいれても十名あまりしかなく、舞いばやしを演ずることのできる方は極めて少なかった。そんなわけで、四音会で観世流受け持ちの五六番のうち二三番は、いつも私が舞うようなことになってしまった。のしめの紋付きにハカタの袴―これがその日の着付けであつた。なお、地には、松浦門や須野崎門あるいは青山門から先生の指名された人が出演され、無本で謡うきまりであつた。松浦先生が高齢であられたので、地頭はいつも須野崎先生がつとめられた。

四音会の世話人で、ご自分では宝生流をよくされた、小鼓の田鍋惣太郎先生は、その後も名古屋能楽界の最長老としてリーダーシップをとられていた。長命な方であつた。

昭和二十五年だったか、今も活躍している観世流師範杉村竹翠君の半白自祝会に招かれて同君の宅へ行つたとき、はからずも田鍋老先生にお目にかかることができた。実に四十年目の再会で、もちろんひと目ではわかつていただけなかったが、昔話をしていゝうちに思い出して下され、あれこれと話題がうかんで来た。なお、杉村君は、小学校時代の同級生で、私より十年ほどあとから斯道にはいつた仁で、大槻十三先生のお取立てで、戦後に職分になつてゐる。

同じく四音会の会員に、田島さんという年配の笛方がおられた。商売関係でときどきわが家にも来られたが、後年私が結婚したあとのある日、妻の母の養女時代名古屋に住んだことがあり、私から言えば同じ小学校の先輩

にあたることがわかって、名古屋の昔話に花が咲いたとき、加賀美屋の田島さんという名が出たので、奇縁を感じたのであった。

同じように、小鼓の青木さんは、後年長弟貞雄の妻の親戚として改めて登場され、新しい関係でおつきあいをするようになった。

四音会に毎回顔を見せていた少年は、私の外にも数人あった。金剛流の尾崎浪音師範の令息はどうされたのであろうか、消息を知らない。小鼓の福井五郎さんは、後日医学博士の学位をとられ、名古屋市の中央部にある某私立病院の副院長になられてからも、多忙の身にも拘らず、能会があると必らず出演して妙音を聞かせてくれたが、十年あまり前に不幸物故された。大鼓の吉田秀夫さんや太鼓の野崎太郎さん（園町小学校で同級であったことがある）は、今や名古屋能楽界の重鎮として活躍中である。

四音会に直接関係はないが、能会のたび狂

言方の少年に伊藤松彦という私と同年ぐらいの少年がいたが、後日「次郎左衛門」を襲名して松阪屋の社長となったことを、附記して本章を終わることにしよう。

そのころの稽古振り

明治末年の名古屋で、観世流の師範としては、立ち方では青山鉞次郎先生、謡では松浦先生、このおふたりだけであったが、そのうちに、前述のような次第で須野崎重豊先生が職分となられ、銀行員だった野村次郎さんもひきつづいて職分となられたように記憶している。この外に、柴田さんという先生がおられたようであるが、ハッキリと覚えていない。

当時各種行事のけいこは、ひとり謡ばかりではなく、琴にしても、花や茶のけいこにしても、月六斎といつて、一六の日（一日・六日・十一日・十六日・二十一日・二十六日）とか二十七の日といった風に、月六回が普通であつて、

今のようによき曜日できめるようなことはなかった。私自身の場合は、青山先生も須野崎先生も、出がいこをお願いしていたが、回数是一般なみの月六斎であつた。

いつも、私が学校から帰つて来るころ、つまり午後四時ごろにご来宅下さるようになったが、殊に須野崎先生の場合は、先生が職分になられるようおすめし、できるだけ後援をしてお約束しているので、夕方お宅から市内のけいこ場に向かへる前に、あるいは、市外のけいこ先から廻られる途中で、わが家へ立ち寄られるので、わが家としては必らずお夕飯をさしあげることにしていた。

そのころ私がしていたいたおけいこ振りを紹介してみよう。座布団はいっさい用いなかった。先生の前の見台の前にすわると、先生が今日やるところを一度謡つて聞かせて下されるのが、次は先生と同吟で謡い、三度目に私がひとりで謡うのだが、悪いところがあ

ると何度でも直して下さつた。――次回のけいこのときは、先ず前回けいこしたところを復習してから、次に進むのが常例であつた。當時使用した謡本は、明治二十三年版の桧本で、今から見ると、ずいぶん達筆の叢書で、しかも変態仮名がたくさん用いられていたものであつた。小学生の私には、実にむづかしい極みであつた。結局は無本でけいこしたようなものであつた。一回に三枚程度、一番を三回で仕上げるのであつた。

ちなみに、このころ改定謡本が出版され、父もその普及に微力を尽くしたのだが、その読みやすさは全く驚いたものであつた。

當時のけいこ振りで、今と違うと思う点を挙げると、そのひとつに、常に「拍子を合わせる」ことがだいじにされていたということがある。須野崎先生も自身太鼓をよくせられたが、拍子に精通されており、自宅のけいこや月次会では、しばしば拍子盤をたたかれた

ことが、記憶に新しい。「拍子盤にならないよう心がけて拍子に合わせる」ようにといつも注意されたものである。そんなわけで、四音会の地へも、須野崎門からも何名かが、先生の指名で出演したわけである。

月次会（つきなみかい）は、毎月一回、先生のお宅（青山先生は謡も教えておられた）で開かれた。たいてい夜六時開会で、四五番謡ったのであるが、各番の役は、先生の指名された人、すなわち最近にその曲のけいこが終わった方のあいだで、クジできめられたが、地謡に出るのもそのけいこが済んでいる人だけというのが常識で、よく守られていたようであった。

新年や春秋二季の大会、あるいは特別の記念会といった催しは、時に料亭の大広間などで開かれた。こんな場合、興を添えるため、一定金額以内で品物を選び、謡にちなんだ福引を考案して、持ち寄って楽しむことなどが

あった。たとえば、田村のキリと書いたクジがあたると、幹事が塩ザケ一尾をブラブラ降り下げて持つて出て来た。「振りシヤケみれば伊勢の海」というわけである。

最後にそのころの月謝の額に言及しておこう。――最初入門するときには、「束脩」（そくしゅう）として一円か二円包んで納めるのが普通で、月謝は月六斎のけいこで金一円也が一般であった。私の場合は、出がいこであったので、年二回、盆と暮に、お中元あるいはお歳暮の品とともに、「御札」と書いた奉書包みをお届けに行った。中身は金十円であった。

炎暑の候の「猩々」

初能の年、すなわち明治四十三年の初夏、名古屋市で共進会が開かれ、多くの来観者でにぎわった。「関西府県連合共進会」という催しで、いってみれば産業紹介と振興のための

博覧会といったものであった。この年は、名古屋開府三百年にあたり、その祝賀を兼ねたものでもあった。

市の東部、愛知郡御器所（ごきそ）村といった「御器所大根」の名所が会場の敷地に選ばれたが、あの跡地が市の公園となった。

今の「鶴舞公園」がこれで、この共進会のために電車の新線（当時は市内線も名鉄電車の経営だった）が、上前津から会場入口（今の鶴舞公園前）まで敷設された。国鉄も中央線に「鶴舞駅」を新設した。

少し余談になるが、このあたりは古来「ツルマ」と呼ばれ、旧幕時代の書き物に、「鶴舞」の字が当てられたものがあると物の本で読んだことがあるが、別に鶴が舞い遊んでいたわけではない。日本の古語で「ツルマ」というのは、ツングース語のような大陸のことば「ツル」（水路のある平地の意）から出たものらしく、ツルマとは「水流（ハザマ）」と解するべきである。ちかごろの人がツルマイと読むが、

これは当て字から来たまちがいである。

さて、本題に立ち戻ることにするが、会場には十数棟の陳列館のほかに特設館もあり、娯楽施設や各種の食堂もあったが、ここで特筆したいのは、能楽堂が作られていたことである。三井物産会社が、北海道材の展示を兼ねて建設したものであった。会期中この舞台で数回能が上演されたが、青山社中でも六月中旬のある日に、能を三番だったかを上演した。そのとき、私は「猩々」をつとめたのであった。

急にきまったことだったので、猛烈なけいこを余儀なくされた。先生のご都合がよい日には、臨時のおけいこを願ったことも数度あった。

ちょうど梅雨季にはいったところだったけれど、その日は極めてよく晴れわたり、炎々たる太陽が上空にあった。

あの長い長い毛の「赤頭」をかぶり、厚板に大口という着付で、私の全身には汗が流れほとばしっていた。「尽きせぬ宿こそめでたけれ」と舞い納め、留め拍子を踏んだあと、揚げ幕さして橋掛りを行くときは、まことに駆けて行きたいほどの思いであつた。

終戦後満州から名古屋市に引き揚げ、何年かたつて米軍の管理から返還された鶴舞公園を何年振りかで訪れたことがあつた。池のそばの築山を見ると、あのとき木曾の山中から材木切り出しの実演をやったところだったなと、思い出したのであつたけれど、どのへんに能楽堂があつたか、訪ねようにもそのすべを知らなかつた。

謡曲修行第一期閉幕

明治の最後の年、四十五年三月に、当時の

名称でいう尋常小学校を卒業し、中学校へ進んだのであるが、級友六人とともに受験した当時の愛知県立第一中学校（今の旭ヶ丘高校の前進）は、七人ともみごとにスベつてしまつた。その謎は今でもわからないが、それはそれとして、その成績発表の日が、県立三中の入学願書受付最終日であつた。

県立三中というのは、当時の海部郡津島町（今の津島市）にあつたのだが、実はこの町が母の実家の所在地で、祖父母も健在で、母の弟妹もいっしょに住んでいた。そんなわけでこの学校の試験を受けることにきめ、ちょうど都合のよい汽車があつたので津島へ急行し、午後三時無事願書を提出することができた。最終の出願者だつたそうである。

そんなような次第で、わが家を離れて祖父母の膝下から通学する中学生となつたのであるが、今でこそ名鉄電車の津島線（この線は私の中学二年の晩秋に開通した）には特急

や急行の電車が疾走しているが、そのころは尾西鉄道という私鉄が関西線の弥富駅で分岐しており、二時間半か三時間に一回ポツポツ列車が動いているという交通不便な時代で、月に一回土曜日に帰省するとき、学校からまっすぐ東へ二十キロの道を歩いて名古屋へ行ったことも何回かあった。

交通不便ということは、先生のご都合とうまく食い合わない結果となるので、私の謡曲修行はここで第一期閉幕のやむなきに立ち至った。予て計画されていた六月の観世会定期能だけではどうにもならず出演したが、そのときシテをつとめた「敦盛」が、私としては能を舞った最後となった。

ここで、私の謡曲修行第一期の思い出を二三記しておきたい。

私が「鞍馬天狗」の子方をつとめたことは前にも書いたが、この舞台を見て下さった森村宜稲（よしね）画伯が、ご褒美だといって

紙本だったが、遠山の桜に近景に鐘樓をえがいた一幅を下さったほか、桐の見台に墨で松の絵をかい下さった。永く秘蔵していたけれど、惜しくも関東大震災で焼いて亡くしてしまった。森村先生は、父と謡のよいお仲間です、私をずいぶんかわいがって下さった。後年文展無鑑査級の大家となられた。

明治の末年の名古屋、旧弊の町といってよい名古屋に、ひとりの造反能楽師がいたことも、特筆に値するだろう。その人は、どんな理由があつたかは知らないが、家元から破門された元観世流職分であつた。姓を今泉といい、私の家の近所に住んでいた。

なにしろ、この先生は、当時堅い禁制であつた「婦人へ謡や仕舞」を教えることをやつてのけたばかりか、奥さんや娘さんに謡や舞を教え四拍子を仕込み、何人かのお弟子を特訓して、今もある劇場御園座の舞台に能舞台を仮設して「能会」を催したものであつた。

芝居小屋で能をやるなんて、昔からご法度だったのを、彼はそれをやったのである。私も両親に連れられてこの能を見物に行ったのであるが、さほどひどいという印象は受けなかったと覚えている。

七月三十日に明治天皇が崩御され、世は諒闇となり、音曲がしばらく停止された。

再び名古屋に住んで：

（終戦後、再び名古屋に住むようになり）杉村君の主宰する竹翠会の春秋二季の大会にも、案内を受けるので、数度出席したが、初めて出席したとき、私の少年時代の大会風景と異なる点をいくつか発見して驚いたことであった。それを思い出して書いてみよう。

① 時間の割には謡の番数が多い。そのせいか番組には曲名の左下に「サシクセ抜

き」といった風に省略部分の指示がしてあった。こんなことは私としては最初の経験であった。お弟子の数が多かったためのやむを得ない処置だとは思ったけれど、味気ない気がした。

② その曲をけいこしたことがない方が平気で地謡に出られることが気になった。全体のまとまりを悪くするのにと思われてならなかった。

③ 役料ということばを聞いたのも、私としては初めての経験で、奇異の感じを禁じ得なかった。

能楽を愛好した人々の思い出集

——「近代名古屋の能楽を支えた人々」に向けられた手紙より——

発行日 平成23年1月20日

発 行 東海能楽研究会 笥 鉦一

〒453-0802 名古屋市中村区下米野3-29 笥 方

電話 052-451-9797

制 作 株式会社 ボン プラニング

〒466-0051 名古屋市昭和区御器所三丁目10-3

電話 052-882-1667
